
とある織斑家の最強親父

理不尽魔王（おりむらはるき）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある織斑家の最強親父

【Nコード】

N7710X

【作者名】

おじいひひろ
理不尽魔王

【あらすじ】

ニート生活満喫してたらマイシスターが子供を残して蒸発しやがった。

仕方がなく引き取り、二人を育てることに・・・。

親父、織斑春樹。娘、織斑千冬。息子、織斑一夏。取り敢えず頑張ろう。二人が立派に育つその日まで・・・。

ドタバタ織斑家劇場、ここに開幕也！

よく更新します。

修正というか新規。こっからはちよくち

読む前に。（必須）

どうも。

今回、書いていた織斑家の最強お父さん！ですが、違和感がかなりあったため、大幅に修正、新規しました。

なので前にも読んだ方で楽しみになさっていた方は申し訳ないのですが、また新しく書かせてもらいます。

読みやすいように書き直し、他のキャラクター視点を加えたので楽しめると思います。

なお、前にアンケートした“一夏の嫁は？”ですが、打ち切らせていただきます。

たくさんの投票、ありがとうございました。

結果は次のようになりました。

一位、篠ノ之箒

二位、凰鈴音

三位、シャルロット・デュノア

親父、爆誕。
(前書き)

修正しました。

親父、爆誕。

本日は晴天なり。

空には憎たらしいほど太陽がさんさんと言うよりかんかん照っております。

自己紹介をしよう。俺の名前は織斑^{おりむら}春樹^{はるき}。

年は三十路、詳しく言えば三十二歳。バリバリのおっさんをしています。

ちなみに童貞。仕事はめんどくさいからやめてニート生活満喫中。

今日も変わらず家にて溜め込んだゲームをプレイしてたんだが・

・

兄さん。悪いんだけど二人をお願いね。私達では育てられないから……。

「……………そりゃない
ぜマイシスター」

「あ、あの……よろしくお願いします。春樹伯父さん」

現在の住所は都内の少し高めのマンションの一室。

玄関の前で肌寒くなってきた日にマイシスターの娘と赤ん坊の息

子が手紙を持って現れ、俺絶賛混乱中。

あの馬鹿二人（一人はゴミ）・・・！子供を押し付けて蒸発しやがったな・・・！

「・・・ん~~~~~まあ入れ。寒いだろ」

「は、はい。お邪魔します・・・」

「荷物寄越せ。重いだろ」

マイシスターの娘から小さな体には似合わない大きな鞆と背中に背負う赤ん坊を受け取ると乱雑した部屋を閉めてリビングにて赤ん坊を寝かせた。

マイシスターの娘はおどしながらリビングに入ると何をしたらいいのかとキョロキョロしていた。

取り敢えず手を無理矢理引っ張ってソファーに座らせると温かいココアを飲ませる。

「・・・おい。まさか秋枝^{あきえ}はお前らを残して消えたのか？」

「・・・・・・・・それは・・・」

「ああ・・・いい、いい。無理に話さなくていいわ」

ココアを飲んでリラックスしたマイシスターの娘と話すとやっぱ
り少し暗い顔して俯いた。

「……んー、大方秋枝の奴が書き置きだけしてあのクソガキ（秋
枝の夫）とどこかに行っただろ。」

昔に親父と喧嘩をしてから会ってないが元気なのかね？

とうるかやはり親父が結婚に反対して正解だわ。あの亭主、働か
ずに秋枝だけを働かせて金を食い潰してたらしいからな。

秋枝もあんなクソガキのどこがいいんだか……。

「んー、行く宛はあるか？」

「……ない、です……。」

どうするか。親父はすでに死んでるし、おふくろも俺が七歳の時
に病気で死んでる。

親戚はいるがいつもこいつもろくでなしだからな……金しか
考えないやつがいるし、育てられるとは思えん。

……仕方がない。

「わかった。あの馬鹿妹に代わって俺がお前らの親父になってやる
よ」

「え、でも！春樹叔父さんに迷惑が……きやう！？」

バチンとデコピンをするとマイシスターの娘は額を押さえて涙目で見てきた。

さあてさて。まずは代理組長とかおやつさんに電話するか。

「なに、するんですか・・・!」

「子供が遠慮すんな。親父からの遺言で秋枝がもし手に追えなくなるような事が起きたらお前らを頼むって言われたんだよ・・・あ、もしもし組長ですか? お久しぶりです、春樹です」

さすが親父。秋枝のことはよくわかってるな。

取り敢えず昔、世話になった人達に電話をして養子縁組申請せねば。

額を押さえながらおろおろする娘に饅頭を渡して電話に集中しながら紙にサラサラと書き込んでいく。

娘は戸惑いながら饅頭をパクリと食べながら俺と赤ん坊をチラチラ見るが取り敢えず無視して電話を掛けまくる。

「はい・・・はい・・・ありがとうおやつさん。助かったよ」

『気にすんな春坊。死んだ馬鹿からの頼みだからいくらでも言いな他にすることないか?』

「それならまた電話するから。うん・・・うん・・・ありがとう。じ

やあな」

電話を切るとサラサラとボールペンで簡単にメモするとい
けてない娘に目を向ける。

「おい」

「は、ひゃい!？」

「出掛けるぞ。上着を着ろ」

「え?え?」

ガサゴソと親父の遺品が入った段ボールを漁ると昔に親父が秋枝
を背負った時に使われた赤ん坊用のあれが見つかる。
のろのろと上着を羽織る娘より早く赤ん坊を背負うと身分証明書
など必要なものを持ち出す。

「養子縁組届けを出すから付き合え。拒否権はない」

「あ、はい・・・わわわわっ」

娘を肩に担いで赤ん坊を背中に背負うとマンションの一室から出
て市役所に向かう。

・・・到着。頭にキングクリムゾンが浮かんだのは気にしない。
養子縁組届けを書き、身分証明書を出して待合室で待つ。

視線がチラチラ感じるがどこ吹く風で受け流しながら赤ん坊をあ
やす。

昔から親戚のガキとか孤児院のガキの面倒を見てたから慣れたも
のだな。

「は、は、春樹が・・・子供を・・・！」

「いやあああああつ！！織斑さんが子供を連れてるううううう！
！」

「神は死んだ！狙ってたのにいいいい！！！」

そんな声が聞こえたのはご愛嬌。

しばらくすると市役所の役員が書類を持ってきて正式にマイシス
ターの子供は俺の養子となった。

掴み掛かる知り合いの股間を蹴り飛ばしたりと色々あったがまず

はマンションに帰ることにした。

「というわけで今日から親父と呼びたまえ」

「い、いや。できたら父さん辺りがいいなって・・・」

「・・・ま、呼び方は好きにしる。部屋はまだあるからそこ使うか？そっちは俺が面倒見なきゃならんから俺の部屋にするが・・・秋枝の奴、大丈夫かね・・・？」

「（・・・母さんから少し聞いてたけど・・・優しそうな人だな・・・）」

・・・織斑春樹。二児のパパになりました。
おりむら ちふゆ
娘、織斑千冬。息子、織斑一夏。
おりむら いちか

俺三十二歳、千冬九歳、一夏一歳。
現在住所ちよい高めのマンション。
残金・・・二億七千万（荒稼ぎしたぜい！）。

織斑春樹・・・任侠の四季組組長の息子であり、数々の伝説を築いた“生ける最後の侍”ラストサムライと呼ばれる人類最強。現在は無職。

人類最強お父さん、ここに爆誕！

第壱話（前書き）

修正しました。

第壱話

本日は晴天なり。

ぽかぽかと陽気な日差しにより、パパは眠気がパネエです。
というか日差しに当たりながら昼寝をしています。

デフォで隣にはマイシスターの娘、千冬が俺の腕を枕にして爆睡。
涎が冷たい。

本日は日曜日。全国のパパさん達は家族サービスをしたり、息子にサンドバッグにされてるでしょう。

ちなみにNewパパさんであるわたくしは育児のめんどくささに
ダウンして死んでおります。

甘かった・・・夜に一夏はギャーギャー泣くし、腹が減ってもギ
ャーギャー泣くし、俺がいないとギャーギャー泣く・・・。

軽くノイローゼになりそうだ。マイシスター、貴様はこれが嫌で
逃げやがったな？そうだろ秋枝エ！！

「・・・すー・・・すー・・・にへへ」

「・・・涎がダラダラだ・・・これ、お気に入りのシャツなんだが
な」

隣で寝る娘、千冬は涎をだらしなく垂らしまくってシャツに染み

を作りまくってやがります。

だが許す。寝顔が可愛いから・・・写メって写メって・・・。

二人、千冬と一夏を引き取ってからすでに一ヶ月。秋枝はあれから手紙も何も寄越さないから心配だと思っこの頃。

千冬は最初は遠慮していたが餌付けにより、なついた。お気に入り料理はきんぴらごぼうである。

お前は年寄りか。

一夏はまだベビーボデーなのでミルクを飲ませてる。

昔にやったことはあるが久しぶりで不安だったが問題なし。一夏は会社帰りのサラリーマン並みにがぶ飲みしていた。

「千冬、は・・・離しそうにないな。足で取るか・・・ほっ」

千冬にはシャツをがっしりとホールドされてるため、寝ながら足を伸ばしてテレビのリモコンを蹴り落として孫の手でフィッシング。テレビをポチッとつけてお昼の定番の笑っていいかもを視聴。

司会のマリモさんとゲストのトークを聞きながら欠伸をする。

日曜日なので平日に出たゲストのトークとCM中の裏話を爆笑しながら視聴視聴。

「・・・にへへへ・・・お父さん・・・」

「あぁっ！千冬の奴、さらに涎を！？」

定番のいいかもっ！を言った途端、千冬の顔が緩みまくり、涎が増幅。マイシャツに湖の染みが広がり始める。

長袖のシャツを着ているため、二の腕から間接部分まで染みが広がり、冷たさに体がブルリと震える。

ぐいぐいと千冬の頭を押して退かせようとするがさらに千冬は頬擦りをし、腕だけでなく胸部分にも染みが浸透中。

妙に力が強いな！ここは親父の遺伝か！？

「離せ千冬！冷たいんだよゴラァ・・・あぁっ！洗濯物干さなきゃ
！」

「でへへへ・・・」

仕方がなく、千冬をおんぶして洗面所に向かい、洗濯機から俺の服や千冬、一夏の服を籠に入れてベランダに直行。

ちなみに二人に買い与えた服は二桁を越えている。

正直、服なんかわからんから適当に買った。

予算はユークロにて買ったため、一万以内。

一夏はベビー！らすで服やらガラガラやらオモチャを購入。計四万七千也。

他にも食材やら増えた家族により予算は倍増。我が家の金が消えていきます。

駄菓子菓子！！

親父が残してくれた金を実家から送金されたので口座の金の桁が跳ね上がる！！

・・・最初見たときは目を疑ったね。0の桁が二つ上がったもん。

親父エ・・・てめえどんだけ貯めてたんだよゴラァ・・・。
妙にコソコソしてたのはこのせいかな。

「今日は天気がいいからもう少し干すか。というかい加減にシャツを変えたい・・・水で、涎が気持ち悪い・・・」

洗濯機から出した洗濯物を全て干すと背中にセミよろしくへばりつく千冬をどうしようか考え中。

いい案が浮かばないため、シャツにへばりつく千冬ごとシャツを脱いで新しいシャツを着る。

シャツを洗濯機に放り込もうと手を伸ばすと固まる。

千冬、俺の涎（生産元、千冬）まみれのシャツを抱き締めながら

寝てやがった。

しかも頬擦りしながら匂いを嗅いでるし。

それを見て千冬の将来が心配になるこの頃。

アホーッ、アホーッ

というわけで夕食。寝ていた千冬も涎を垂らしながら起床。自分の現状に気付くとトマトのように赤くなって暴れる。顎を殴られる。ちなみに昇 拳より完璧なアッパーだった。

落ち着いた千冬に麦茶を出して夕食開始。

今日のメニューは寒いから二人で鍋をつつくことにした。

「一夏はあーあー言いながら鍋に手を伸ばすがベビーにはまだ早い。ミルクを飲んでいたまえ。」

「あ！お父さん、それは私が育てた肉だ！」

「知らん。俺のシャツを涎まみれにたくせにそれはないだろ。それに世の中は弱肉強食、食うのも食われるのも当たり前なのだよ千冬！」

「！？し、知らなかった・・・！さすがお父さん！勉強になる！」

・・・ふつ。チヨ口いな・・・ガキなんざこれにて封殺できるのさ。

大人気ないな俺。

そのせいで将来、千冬を再教育するのに苦労するのはまた別の話。

夕食のシメにラーメンをどっぴり入れて完食。二人分だから腹はちょうどいいくらい。

皿洗いをしている際、千冬はテレビでナニコレ？奇想天外写真集と日曜日特番の番組を見ていた。

おーとかあーとかうわーとか言う千冬の後ろにはバタバタ手足を

動かす一夏。大人しくしろ。

皿洗いを終わらせるとテーブルに座って緑茶を飲みながらホッと一息。

千冬はいまだにナニコレ？奇想天外写真集をガン見しながらみかんを食べていた。

もう完全に冬モードだな。千冬なだけに。

そんな冗談は置いてテレビを見る千冬をそのままに、一夏を連れて入浴することにした。

髪は少しずつ生えてるがまだ坊主のツルテカハゲ頭のように髪は薄かった。

・・・親父の知り合いのクソ坊主、あの頭は凶器だ。

日光を反射して紙を焼き尽くすなんてどんな人間だ。よくよく考えたら親父の知り合いにはまともな奴いない気がする・・・。

変態露出狂が当たり前みたいになってるからな。うちの実家。

シャツの長袖を捲り、ズボンも膝まで捲った状態で一夏の体を入念に洗う。

・・・当たり前だがまだチコは小さいな・・・俺は大口徑マグナムだが。

親父はあれだ。拳銃どころかデスター並みのでかさだな。

「うー、あー、あー」

「ん？もう出るのか・・・って眠たそうだな。頭がカクンカクン動いてるぞ一夏」

下らない事を考えてると一夏がうとうとし始めたため、冷めないように丁寧に拭いてから服を着させてベビーベッドにダイブイン。

一夏は眠りについた（ドラ エ風に）！

脱力しながらテレビをいまだに見る千冬に風呂に入れと言った。なのに千冬は一緒に入る！と言って聞かないため、仕方なく入浴。俺はロリコンではないため、欲情はしないが。

「あ、お父さん。今度の木曜日に授業参観があるんだが・・・大丈夫？」

「んー？暇だから行けるぞ。一夏なら姐さんに預けたら大丈夫だし・・・というか日本にいるのか？連れていくのがいいかな？（ボソッ）」

「そ、そう・・・やった・・・」

湯船に二人で浸かりながら話すと予定ができた。

こういうのを話していると千冬が成長していると実感できる気がする。

こうして織斑家の日曜日は幕を閉じた。

千冬はいつものごとく俺の布団に潜り込んで俺を抱き枕にしながら

ら熟睡開始。

寝顔が可愛いので気にしないよ。

第貳話（前書き）

修正しました。

第貳話

本日は曇りのち晴れ。

お天道様は雲に隠れ、洗濯物が乾きにくい日である。

実際にリビングのベランダに続く窓やらには洗濯物が干してある。

そして本日は火曜日。千冬の授業参観から三週間過ぎた頃。

我輩はパパさんなので家にて一夏と遊戯中。

千冬は小学生なので小学校に登校。

「あー、あー」

「いてててて！髪を引っ張るな一夏！」

きゃっきゃつと笑うベビーボデーのマイサンは俺の髪を引っ張って遊んでおります。

髪を切らないので簡単に整えて縛ってポニーテールにしている。

そのため、一夏の一番お気に入りのおモチャとなっていた。なぜだ。

そして娘は小学校にて頭が痛む勉強をしている。

前の木曜日に参加した授業参観の保護者面談では千冬はリーダーシップを発揮して皆を引っ張るから助かる。などと担任に言われた。俺が義理の父親になったことを聞いてきたがはぐらかして保護者面談を済ませて千冬と手を繋いで帰宅。千冬は終始笑顔だった。

授業参観でも千冬は特に勉強がわからないって事はなかったの
でパパとしては一安心一安心。

ちゃんと勉強はさせてるみたいだな、秋枝。

「まむまむ」

「ぎえあああつ！？一夏、俺の髪を食べるでない！」

ボーツと一夏を組んだ脚の中にすっぽり埋めて平日の笑っていい
かもを見ていると一夏がポニテの俺の髪を口にくわえてもむもむ食
べていた。

離させようとすればごねて泣くため、何かないと周りを見渡す。

テレビから司会のマリモさんの声と観客の笑い声が聞こえるのを
傍目に、部屋を物色する事にした。

赤ちゃん用のおしゃぶりは一夏が気に入らないから駄目。オモチ
ヤ・・・却下。

・・・一夏って・・・何が好きなん？

「あー！あー！」

「いだだだだっ！」

どうするか考えていたら一夏に思いっきり髪を引つ張られ、一夏を見た。

そしたら物欲しそうな目をしてジーツと見てくるため、理解。

ミルクか。こいつ、ミルクを要求しているのか。

「あー・・・わかったわかった。準備するから待てや」

「あー！あー！あいー！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・なんだこの胸のトキメキは・・・・これが、親バカの心得か！？」

両手を上げて喜びを体現する一夏を見て心がなぜかトキメいた。

・・・ああ・・・親父・・・刻が見えるよ・・・新しい親の愛に目覚めそうだよ・・・。

“いちかせんよう”と書かれた瓶に粉を入れていつものようにミルクを作ると手で少し温度を調整する。

出来上がったそれを一夏の前に置くと一夏はハイハイしながら瓶を持ってぐびぐび飲み始めた。

ハイハイはできるが、まだ立てないみたいだから残念。

「あーいー！」

「……………一夏のバックに銭湯の脱衣場が見えた……………疲れてるのか俺は？」

銭湯の脱衣場がもやもやと一夏の後ろに浮かぶとぷはー！と牛乳瓶を飲むサラリーマン風の男や腰にタオルを巻いたジジイが見えた。
……………疲れてるのか俺は。今から寝た方がいいのか？

多少げんなりしながら一夏のミルクを作る合間に作った焼きそばを食べながらミルク瓶を持つ一夏を眺める。

「あー！あー！あいー！あーうー！」

「……………少しは静かにできないのかおのれは。ジャングルのゴリラみたいだぞ」

なぜか一夏はチーターのごきげんようを見ながら発狂してミルク瓶を振り回していた。

……………将来は親父似だな。母さんの要素はないわ。
秋枝はどちらかといえば母さん似だけど。
でも親父の負の遺産（遺伝子）はたつぷりと受け継いでるからな。

焼きそばを食い終わると一夏からミルク瓶を没収し、一緒に洗う。

「みゃーっー！」

「いだだだだっ！痛い！痛いって一夏！」

皿洗いをしていると一夏がいつの間にか台所に来て髪にぶら下がって遊んでいた。

無論、後ろに引っ張られるから首が後ろに反れ、首が変な音を立てていた。

ミルクは無いから諦める！

皿洗いを速攻で終わらせると猿よろしく髪にぶら下がる一夏を抱き上げて首を回す。

バキバキ鳴った。一夏が反応して喜んだ。

「あいー！」

「いたた・・・元気いいな一夏。パパは体が持ちそうにないぜ」

「あーっー！」

「・・・もうどうにでもなれ。親父、昔は苦労したんだな・・・子育て大変だ。改めて育ててくれてありがとう・・・」

少ししんみりしながら一夏を抱いたまま、ソファーに座ると一夏は手を伸ばして俺の鼻に突っ込んだり、口の中に指を入れたり好き放題していた。

なすがままにされていると疲れがどんどん貯まり始め、気のせいかげっそりしてきた。

・・・ホームヘルパーか姐さん呼ぼうかな？

ホームヘルパーはやめとこう。たぶん手に追えなくてギブアップするし、金ももつたいない。

姐さんと呼ぶにしてもどこにいるかわからんし、貞操を寄越せと言われそうだから却下。

・・・・・・駄目だな。親父が生きてればなんとかあったが今はいない。一人で頑張るしかないな。

「前途多難だな・・・」

「うー」

膝に大人しく座る一夏とテレビの再放送ドラマを見ながらどうしようかと再び思考に入る。

取り敢えず一夏が幼稚園に入るまでは家にいるようにして、幼稚園に入ればおやつさんか姐さんのツテで就職するってのが今考えている事である。

小学校の担任にも仕事は何してますか？って言われて無職ですと

か言えないから働かねば。

二ト生活前、親父が死ぬ前は工事現場、四季組のカチコミ応援、外国にてテロリスト狩りをしていたな。

俺がまだ四季組の一員として動いていた頃はこんな苦労はなかったんだがな・・・親戚のガキつて言つても小学生くらいの奴を世話したただけだな。一夏みたいな赤ん坊ははじめてだ。

そして辛い。死ぬ。疲れる。簡単に引き取ると発言した俺を殴りたい。

・・・でもたまに見せる千冬のはにかんだ笑顔、一夏の喜ぶ姿を見ればそれは無くなった。

ああ、俺は尊い命を育ててるんだな。と改めて実感させられた。

親父が言っていた命の尊さがわかってきた。

「一夏、ほれほれ」

「あう！ あー！ あー！ あー！ あー！ あー！」

考えるのをやめ、自分のポニーテールの髪を猫じゃらしのように一夏の目の前で振る。

一夏、絶賛反応中。猫のように髪を掴もうと小さな手で猫パンチ猫パンチ。

しばらく遊んでいると千冬帰宅。

赤いランドセルを背負い、新聞の夕刊や手紙とかを持ってリビン
グにログイン。

「ただいまお父さん」

「お帰り千冬。今日はどうだった？」

「んー、特には無かった。でも遠足があるからプリントをもらってきた」

「・・・ん？遠足？こんな寒くなってきた時期にか？」

ポニーテールの髪を一夏がギリギリ届くか届かないかの場所に垂らすように首に巻き付けて千冬からプリントをもらい、チエツク。一夏はあーあー言いながら髪に手を伸ばすが届かず。泣きそうになれば触らせてまた・・・といった感じをしながらプリントを読み終える。

11月7日に遠足・・・よくよく見たら弁当持参って書いてるな・・・あれ？俺が作るのか？

クフフフ・・・姐さんとおやつさんからお墨付きの俺の料理の腕をみたいと申すか・・・。

「・・・ん。わかったわ、取り敢えず手を洗ってうがいへゴー。冷蔵庫にチーズケーキがある」

「いただきます！」

ダダダツと千冬が洗面所に向かうといまだに髪に手を伸ばす一夏を見てベビーベッドに収納、又は幽閉。

泣きそうな一夏を見て張り裂けそうになるマイハートを必死で我慢しながらホットココアを作る。

千冬が戻ると一目散にチーズケーキにかぶりつき、完食。

・・・はやつ。一瞬でなくなったな、チーズケーキ。

「宿題あるならやつとけ。飯はまだかかるからな」

「わかった!」

「できたら檻に入ってる一夏の相手もよろしく。オムツは変えたからやらなくてよし」

そう言つと包丁でネギをとんとんと切っていく。

千冬はランドセルからプリントやらノートを出して宿題をし始めた。

それを見ながらキャベツを上に向けて包丁で秘剣・千切り。

フライパンで炒めながら味噌汁を作る。

「んー・・・味が薄いかな？味噌味噌・・・っと」

味噌汁の味を確認しながら味を整えて料理を作っていく。

刻んだネギを味噌汁に入れると一回、二回、三回とかき混ぜて火

を止める。

切ったキャベツを皿に盛り、焼いておいた豚のしょうが焼きを盛り付けて完成。

ご飯も炊けたから台拭きを持ってテーブルへ。

テーブルをしっかりと拭いて料理を並べる。

並べると千冬を呼ぼうとテレビ前に行くと千冬は一夏と遊んでいた。

ポンポンと肩を叩いて千冬とテーブルに座ると茶碗に白米と味噌汁を入れて手を合わせる。

「いただきます」

千冬としつかりいただきますを言うとまずは豚のしょうが焼きを食べる。うん。うまい。

千冬を見るとパクパク食べており、嬉しそうにキャベツにドレッシングをかけて食べていた。

俺は空の茶碗に盛り盛りと白米を盛ると二杯目を千冬に渡す。

「取り敢えず弁当は作ろう。何がいい？」

「きんぴらごぼう！」

・・・二回目だけ・・・。

お前は年寄りか。

でもまあ、弁当の中身は決まったな。

まずは千冬ご要望のきんぴらごぼう。そして定番の玉子にタコさんウィンナー、後は子供らしくハンバーグでも入れよう。

うーむ・・・親父は違うが、姐さんとおやつさんは料理得意だからな・・・かなり鍛えられてるから何でも作れるが朝早く起きなきゃな。

小学校の給食で弁当いらなかったから朝飯と晩飯だけでよかったが弁当となれば早起しなくては。

四季組にいた時は普通に朝五時に起床してたんだがな・・・。

夕食完食。皿洗いを再びやる最中に千冬を風呂に入らせる。

一夏はすでにドリームインしており、ベビーベッドで寝ている。

「・・・遠足か・・・嫌な思い出しかない。千冬には楽しんでもらいたいものだな」

そう考えると昔のあの記憶が蘇って体がブルリと震えた。

あ、あれは・・・悪夢だったな。

そんなことはお構い無しに千冬は風呂から出て牛乳を飲んでいた。

・・・これ、親父の遺伝だろ。親父、風呂から出たら牛乳か日本酒を飲むのが好きだったからな。

皿洗いを終わると昼に洗った分まで乾燥機に纏めて入れてスイッチオン。明日の朝には終わってるはず。
着替えを持って脱衣場に行き、入浴。

・・・ああ・・・昼の疲れが癒される・・・！風呂は命の洗濯？
とか言ってたやつがいたはず。うん。
こうして一日は終わるのであった。

第参話（前書き）

修正しました。

第参話

本日は晴天なり。

気温、湿度共に過ごしやすい日であり、外で活動するにはもってこいである。

少し肌寒いが、服をしっかりと着れば問題はないと思う。

本日は千冬の遠足である。

場所は誰が決めたのか、動物園と水族館がある大規模な公園である。

「あー、あー」

「・・・眠いんだよ一夏・・・少しだけ寝させてくれよ」

「あー！あー！」

「・・・」

そして俺と一夏は家で留守番、というよりはいつものようにだらけた生活をしている。

・・・ニートとか言っな。主夫と言え主夫と。

・・・というか一夏痛い。ペシペシ叩くでない。

今日の朝は千冬の弁当作りに早起きしたんだから眠たいの。

リビングのソファーに寝転がる俺の上ではしゃぐ一夏を眠たそうに見ながら一夏のペシペシを止める。

そうすると一夏はあーあー言いながら髪を再び持ってまむまむと口に入れて食べ始めた。

・・・一夏にとって俺の髪は食い物なのか？前も俺の髪、食われて一夏の涎まみれだったし。

・・・今度、昆布かわかめを渡してみるか。似てるし。

さてさて。時間があるので軽く俺の事を説明しよう。

まずは四季組。日本最大の任侠に生きる日本古来から存在する武士の血を継ぐ組織と言われてる由緒ある一家。

その組長は代々“織斑”が受け継ぎ、もともと力があるものが組長となると決まりがある。

そして四季組に生まれ、織斑の姓に生まれた者は名前に四季が入っている。

俺は春樹で“春”。妹の秋枝は“秋”。

千冬と一夏も“冬”と“夏”がある。

親父は冬樹ふゆきで“冬”を持っていた。母さんは嫁いできたからないが似たような感じはある。

織斑家直属はみな、ある特徴を持って生まれている。

それは類いまれなる才能。

親父にしろ、俺にしろ、何かしらの人外の才能を持っている。

俺は親父には劣るがあらゆる面で才能を受け継いだ。

おかげで四季組からはバグキャラと呼ばれるくらい、人類最強の戦闘能力を持っている。

親父が生きていたら親父が人類最強だが。

反対に、秋枝はあまり才能はなかったが、普通の人なら才能があると言われる程度にはあった。

おかげで、四季組の頭のお堅い馬鹿のせいで秋枝は荒んでいたが。

いつの間にか一夏は寝ているため、久しぶりにテレビでゲームをプレイ。

千冬と一夏が養子になってから家事やらで忙しかったから久しぶりだな。本当に。

「……………なぜだ。中途半端にやる気が出ないぞ」

話は戻して四季組についてを少し話そう。

親父で四季組九代目の組長であり、歴代最強の組長でもある。

現在の組長は代理組長で俺が受け継ぐべきなのだが、今はまだ戻る気はない。

四季組九代目の親父の息子である俺は組長にならねばならないのだが、親父の遺言で組長にはならなくてもいいと言われているからという理由もあるけどな。

親父は小さい頃に自由に生きられなかったからせめて息子だけはと自由にくれたのである。

これだけを聞けば美談だが昔の親父を思えば感謝する気になれない。

「うー」

「やめやめ。一夏と寝とこ」

小学生の時の遠足で俺は山に行ったのだが、運の悪いことに山で熊に遭遇した。

小学生の時からずば抜けた運動神経で熊を撃退したが全治三ヶ月の怪我をし、入院することになった。

治ったのも束の間、親父は熊に負けるとは何事だ！と叫び、俺を最強の熊であるグリズリーとサシで戦わせた経歴がある。

なんとか生き残ったのだが・・・全治半年の重症の怪我を負い、入院リターン。

死ぬかと思った。小学二年生である当時の俺はグリズリーと戦うのは恐怖以外の何物でもなかった。

退院すると真っ先に親父に殴りかかったが見事に返り討ち。再び入院して一躍ナースさん達の人気者になった事がある。

退院 親父に殴りかかる 返り討ち 入院 ナースさん達のオモチャになる 退院と永遠にループしてたのが小学校の思い出である。

碌なもんじゃねえな・・・やたらと女性に好かれるし。

中学に上がってからには親父に勝つために親父の知り合いの道場で鍛えながら親父に挑んだが全戦全敗。

以前は骨を完膚なきまでに叩き折られたが中学二年生から折れなくなってきた。

俺の知らないうちにボロボロの姿が男らしいと中学のアイドル的な存在になってたらしい。

中学三年生より道場の剣術を習い始める。

高校に上がると親父と互角に渡り合っていたが、親父は今の今まで手加減していたため、小学校の無限ループ再来。貞操をナースさんに狙われる毎日を過ごした。

親父と喧嘩しながらも勉強は怠らずにクラストップ10に入るようにはした。

じゃねーと戦ってくれないし、飯抜きになるもん。

道場で剣術を習いながら部活の最終兵器として活躍。報酬はあんばん七個である。

高校を卒業すると大学には行かずに親父を叩きのめすために四季組の若頭となった。

当時は日本のヤクザや外国のマフィア相手に暴れに暴れ、詐欺をしてる組織も潰して回った。

銃弾の雨すら避ける俺を見て四季組がバグキャラ、ラストサムライ“最後の侍”だなんて呼ばれ始めたのもこの頃である。

・・・結局、親父が六十七歳で亡くなるまで俺は勝つことができなかった。

秋枝が駆け落ちした？心労で亡くなり、親父は四季組の全員に見送られながら逝った・・・が。

絶対に親父、天国にしる地獄にしる、神や閻魔相手に暴れているイメージがあるからそれほど悲しんではないけど。

前に神様相手に戦ったら勝てるかの？みたいに言ってたのを聞いたし。

「・・・親父、か・・・俺も親父なんだけどなあ・・・」

眠っている一夏を見ながらそう思うと親父の話を聞かせようか迷った。

親父の話は普通の人には聞かせられないからな・・・と思う。

俺は小さい頃から親父のチートっぷりを誰よりも知ってるからな。一夏や千冬に聞かせたら四季組の妙な雰囲気染まりそうで怖い。

孫の顔が見たい！

「ぬおっ!？」

いつの間にか一夏と熟睡しており、死んだはずの親父の声が聞こえると驚いて寝ていたソファから飛び起きた。

「いたい・・・!」

「ん? 帰ってたのか千冬・・・っていま何時だ?」

下を見ると千冬が額を押さえて涙目になっており、ジトーツと見てきた。

頭を撫でながら時間を確認すると午後五時。どうやら昼前から爆睡してたようだ。

千冬は帰ってきたばかりのようで寝ていた俺を馬乗りになって覗いているとひっくり返り、痛みに堪えてるらしい。

ちなみに一夏は千冬がベビーベッドに乗せており、腹の上から消えていた。

偉い偉い。頭をさらに撫でてやろう。

「・・・はふう・・・お父さん、もう夕方だけど寝てていいの？一夏もずっとお父さんの腹の上で寝ていたんだけど・・・」

「んあー、悪い。朝に早起したからつい、な・・・」

「うー。一夏、お腹が空いていて泣いていたんだぞ？気を付けてよお父さん」

あー、それは悪い事をしたな・・・一夏には少し高めのミルクをあげようか。

千冬は俺に撫でられながら、一夏の頭を撫でながら言うが反省しないとな。あまり空腹にさせると成長に悪いって親父が言ってたしな。

拗ねた感じの千冬の要望、“ぎゅーっ”と抱きしめて？”により、背骨が折れる勢いで抱きしめる。

まあ、軽く・・・だが。人類最強の俺が本気を出したらスプラッタになるのは見えているから。

「えっとね！今日の遠足は・・・」

「ほうほう」

抱きしめた後、千冬は楽しそうに遠足について話し出す。

動物園でライオンとじゃれた、ゴリラと握手した、水族館でペンギンを触った、イルカに餌をあげた。と話した。

・・・動物園のくだりはツツコミをするべきなのか？
親父みたいになってんじゃないか。

「でね！たばねちゃんが弁当を交換しようってやってね！美味しいって言ってくれた！」

「それは嬉しいな」

「お父さん、料理上手だからね！」

「・・・今日の晩飯は奮発して刺身にするか。ホタテを主にして」

「本当！？」

千冬、小学生から刺身好きで特にホタテが好物な小学生らしからぬ小学生である。

誉められたのが嬉しいので奮発。まだ時間があるので千冬と一夏と買い物に行こう。

ジャ コでいいか。

そうと決まれば金だ金。財布には諭吉が数十人いるから余裕で買
い物はできるだろう。

部屋着であるジーパンに長袖のシャツの上にパーカーを羽織って
から一夏のベビーカーを玄関から出す。

千冬と一夏と外に出ると鍵を閉め、ベビーカーに一夏を入れて寒
くないように毛布をかけた。

「なんかいる？好きなもの一つくらい買ってやるぞ」

「・・・む。ありそうでないよお父さん」

「考えとけ。じゃ行きますか」

「おゝ！」

「あいゝ！」

ジャ コに行き、晩飯の買い物をして千冬にホタテを食わせた。
シヨッピング中は逆ナンが多かったので疲れた。
なぜ女性に逆ナンされるんだ俺は・・・。

第肆話（前書き）

修正しました。

第肆話

本日は晴天なり。

寒かった冬も終わり、春、夏と季節は変わって暑い夏から涼しくなってきたこの頃。

我が織斑家では千冬と一夏で楽しく過ごしております。

なんとなんと！今日は記念すべき日。我が息子、一夏の二歳の誕生日であるのだ！

「お父さん、これはこれでいい？」

「いいぞ」

「あうー！」

というわけで今日は家のリビングを誕生日仕様にして一夏を祝うことにした。

引き取ってから一年近く、千冬と一夏と暮らし始めたため、一夏はハイハイから立ち上がることができるようになっていた。少しは歩けるがまだまだといったところ。

去年の冬には千冬の誕生日があり、その時は一夏と同様、盛大に祝った。

ちなみにだが、千冬は十二月七日、一夏は九月二十七日、俺は九

月十五日が誕生日である。

織斑家では生まれた季節によって名前を決めるのだが、俺は異端で夏に生まれたのに“春”を与えられた。

親父曰く、わしの親父と雰囲気が似てたから。らしい。

まあ、つまりは俺の爺ちゃん、八代目四季組組長の事である。

顔は知らない。アルバムで見たことはあるが、会ったことはない。

「それよりお父さん？一夏のプレゼントってあるの？」

「ん」

「？・・・まさか、あれ・・・？」

一夏にとんがり帽子を被せながらあるものを指差すとそこには大量のラッピングされた箱が積み重なっていた。

千冬はそれを見て顔をひきつらせ、指を指していた。

・・・まあ、これは四季組勢からのプレゼントなんだが。

組長代理や昔に親父にお世話になった奴等、おやっさん、姐さん、四季組の幹部メンバーが一夏に贈ってきたのだ。

若様にプレゼントを！ってな。

千冬の時もあいつら、一夏と同じくらいのプレゼントを贈ってきたからな。

千冬が啞然としていたから予想なんかつかなかったんだろうな。

取り敢えず中身を確認したら変なものが出るわ出るわでさすがの俺も呆れ果てた。

ドスやら日本酒やらチャカ（拳銃）やらと子供にあるまじきプレゼントがあった。

それらは四季組に贈り返して贈った奴等を血祭りにしたが。

「・・・お父さん、また変なの入ってないよね？」

「・・・不安すぎる」

プレゼントの中には髪飾りや櫛など、千冬に似合うものがあつたがどれも高級品のため、少しあれである。

他にも洋服や着物を贈ってきたがそれは大事に仕舞つてある。

準備を終え、プレゼントの山を千冬と眺めていると不安のせいか、プレゼントから真っ黒なオーラが噴き出してる気がする。

「・・・お父さん、やってよ」

「・・・千冬に譲る」

「・・・」

手をプレゼントに向けながら俺達は見つめ合つて固まる。

「「・・・じゃん、けん！」」

「ぼん！」

「ぼおおん！！」

俺、パー。

千冬、チヨキ。

勝者、千冬。

「……………神は残酷だっ！！」

「やった！去年みたいな事はしなくて済む！」

「…………変なものを見つけたらもなく地獄への片道切符を贈ってやろう。オプシオンで本気のグーパンだ」

喜ぶ千冬に俺はげんなりしながらプレゼントの山の中を調べる。

…………うん。去年の千冬のプレゼントの中にパンダの子供とかいたのは驚いたな。

一時、ワシントン条約でしょっぴかれそうになったし。

四季組、日本の警察には不可侵の組織だが国際組織相手ではどうにもならん。

国を巻き込んだ陰謀をしたテロリストとかマフィアを潰した借りはあるがワシントン条約じゃあ…………ねえ？

「・・・案外マトモだな」

「あれ？これっておしゃぶり？」

「他にはオムツやらなんやらベビーグッズが多いな」

プレゼントを開けに開けるとベビーグッズしか出てこない。
今年はヤバイものはないのか？と思いながらさらにプレゼントを
確認していく。

七割方終わると合計120ほどのプレゼントが開けられた。
その中には浴衣やらなんやらと着るものや将来に使いそうなもの
がわんさか出てきた。

去年みたいなドスやら刀とかはなくて安心・・・したところにと
んでもないものが出た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・マジでか？」

「金ぴか・・・！」

やたらと重い箱を開けると金塊がぎっしりと詰まっていた。
馬鹿か？あいつらは馬鹿なのか？一夏に金塊あげてなんになる？
まさに豚に真珠、子供に金塊だろうがっ！

「返そう。こんなのもらっても役に立たん。贈り返せ贈り返せ」

「・・・はぁ・・・重い・・・」

千冬は両手で金塊のひとつを持つと嘆息しながら元に戻した。

取り敢えずその金塊の山はきっちり返すことにした。お詫びに地獄への片道切符付きで。

んー、祝ってくれるのは嬉しいがもうやめさせよう。

一夏が大きくなってこれを見たらグレるかもしれんし。

某大晦日の恒例のあれ（ガキ使）に出る引き出しを開けるみたいなドキドキ感はいらん。

「おとう、しゃー！」

「ん？」

下に軽い衝撃があり、見てみると一夏が小さな体で足に抱きついていた。

上目遣いで俺を見てきたため、抱き上げて一夏と目を合わせる。

「どうした一夏」

「お、なか・・・しゅいた！」

「・・・さすがは親父の孫・・・成長が早すぎるな」

この一年で一夏はかなり成長し、舌つ足らずだが少しは喋れる。
第一声は“おとうしゃ”だから俺は舞い上がり、千冬は地味に落ち込んでいた。

どうやら密かにお姉ちゃんって呼ばれるのを楽しみにしてたらしい。

まあ、今は“ねえちゃ”で千冬を呼んでいるけどな。千冬のやつ、俺にかなり自慢してた。

今日は運がよく、日曜日。なので千冬と一夏と遊びながら一夏の誕生日の準備をした。

ミルクを飲んでいた一夏は離乳食を食べるようになり、もう少しで三人でケーキを食べられそうでパパは楽しみです。

「・・・よし。千冬、そろそろ食べようか。時間もいい頃だしな」

「わかった！私はお皿を出す！」

「みゃー！」

「一夏も楽しみか？でもまだケーキは食べさせられないから・・・来年辺りには大丈夫だから。な？」

「みゃーっー！」

ズルいぞ！と言いたいのか、一夏は手を上げて叫ぶ。

一夏はまだ“おとうしゃ”“ねえちゃ”“おなかすいた”しか喋ることができない。

余談だが、おなかすいたは千冬を真似したようで千冬はかなり気まずそうであった。

お前、腹ぺコキャラだったか？

それは置いといて。ヤバいので贈り返すプレゼントと保存するプレゼント、今から使う予定のプレゼントと分けると邪魔にならない場所に置く。

それから一夏をベビー用の椅子に座らせると千冬もまた、椅子に座る。

「一夏はこれで千冬はこれ。後は・・・これでいいか」

「うわ・・・またすごいね・・・」

「あいいー！」

「当たり前。息子を祝うんだから遠慮はせんぞ俺は」

「でも一夏は食べられないよね？」

「・・・・・・・・・・」

千冬のメスのように鋭いツツコミにより、俺沈黙。
それを見た千冬はハッとして慰めるようにわたわたと手を振る。

・・・確かにそうだけども・・・祝うくらいいいだろ？息子のはじめての誕生日なんだからさ・・・。

「・・・で。お父さん？また食べないの？」

「・・・いや。俺は食べなくても大丈夫なんだが・・・」

「駄目！しっかり食べてよお父さん！」

そんなこんなで一夏のバースデーケーキの火を千冬が代わりに消すと二人で料理を食べ始める。

しかし、千冬のジト目により空気が凍るのを感じた。

ビシッと俺を指差すと千冬は誕生日用の手羽先をぐいぐいと押し付けてくる。

正直、俺は食べるのは好きじゃないんだがな・・・。

二日に一回の食事で持つし、ニート生活では丸二週間も食べなかったことがあった。

そのせいで知り合いや四季組のみんなに心配されたが死なないからいいだろ？って思う。

少食なんだよ。俺はさ・・・。

だが、娘となった千冬により、食事は必ず三食食べるように言われた。

おかげで58？だった体重が67？まで増えてしまったし・・・。

「・・・めんどくさいな・・・食わなくても死なないから俺は」

「駄目！」

昔に親父にグリズリーとサシで戦わせた時の他にジャングルやら雪山に放り出されたせいでサバイバル技術がプロ以上になり、食事も取らなくていいようになった経歴がある。

そのせいか、親父が死んでニート生活をしていても餓死はしなかったのだ。

なのに戦闘力は変わらずといったまさにバグキャラなのである。俺は。

全盛期時には身長は変わらないが体重は65？と痩せ体型ではあるが体は引き締まる。といった人外の肉体を持っていたのである。

これは親父の遺伝であり、なぜかを一度聞いてみると。

「気合いだ」

と理論完全無視なお言葉をいただいた。

取り敢えず、見た目とは反して俺の肉体はスゴい。と思えばよし。付け加えるなら人類の神秘を超越した神秘と思え。

「ほら！もつと食べてよ！」

「や、やめ・・・食えない・・・！」

「きやはは
」

・・・ま。いつか。こんな誕生日も思い出になる。
一夏。誕生日おめでとうな。これからもよろしく。俺の大事な息
子よ・・・。

第伍話（前書き）

修正しました。

第伍話

本日は曇りのち雨なり。

空は灰色に染まり、雨はポツポツと降っているが俺はある場所に来ている。

ちなみに今日は平日。千冬は学校、一夏は幼稚園に入っ
て預けている。

「採用」

「はやいなおいっ！」

とある場所、それは・・・

「じゃあ明日からお願いしますね。制服とかはこちらで用意しますから。あ、休日は水曜日と土曜日に日曜日でいいですか？」

「ええ、まあ・・・」

「大変ですねえ・・・二十歳で子供二人を・・・」

「ちょっとストップ。・・・年齢、書いてますけど・・・読みました？」

「はっはっはっは！もちろんじゃありませんか！二十・・・え？三十・・・四歳・・・？え、まさか嘘ですよね？」

「なぜ嘘と呼ばれなければならないんだ・・・嘘言っても仕方ないでしょう」

「・・・ええええええええええっ！？若すぎるわよっ！！」

静かなオフィスにて面接官の女性の甲高い声が響き渡った。

おわかり？俺は現在、とある会社の面接に来ております。

仕事内容は清掃。姐さんとおやっさんのツテで探してもらって今日、こうして来たわけである。

結果採用！のんびり働きまっせ！

「じゃあ今の通りをお願いします・・・ところで今日の夜は暇ですか？よかつたら私とホテルに行きませんか？」

「死ね」

会社の正社員だから、部長だからと遠慮はしない。

食事ではなくやろうと言う面接官の女性部長に笑顔で“死ね”と言った。

・・・なのに何かに悶える姿ははつきり言って気持ち悪い。

この女性、真性のドMアマなのか？

説明は受けて大体は理解したので清掃員用の備品庫に向かうことにした。取り敢えずこの部長とは関わりたくない。

与えられた仕事はビルの清掃やトイレの清掃に備品補充。

「まあいいか」

めんどくさいがやろうか。姐さんとおやつさんがわざわざ紹介してくれた仕事だし。

仕事は明日からなので一夏を迎えに行くか。

親父、移動。幼稚園到着

「あ、おとうさん！」

「よう」

「こ、こんにちは織斑さん！」

「どうも先生。一夏を預かってくれてありがとうございます」

「は、はう・・・」

一夏がいる幼稚園に着くと真っ先に一夏は俺を見つけ、抱きついてきた。

そこに一夏を担当する先生が挨拶をしてきたので返す。

するとなぜか女性の先生は顔を赤くして俯いてしまった。

「あれ？せんせー、かおあかいよ？」

「な、なんでもないわよ一夏君！？織斑さん、これ！伝達用のプリントです！」

「はあ・・・どうも・・・」

「で、では私はこれにて失礼しましゅ！」

わたたと先生はプリントを俺に渡すと建物の中に走っていった。それを俺と一夏はそれを見ると顔を合わせて同時に首を傾げた。

・・・なんなんだ？

「・・・帰ろうか」

「うん！」

帰ることにした。

帰る途中で一夏と幼稚園の 君は絵が上手とか、 ちゃんは
かわいいとか、 先生がよく俺の事を聞いてきたと話してくれた。
なんで先生方は俺の事を聞いたんだ？なんかしたか俺は？

また女性に好かれるとか・・・。

「でね！ほつきちゃんがおれにたまごやきをくれたんだよ！」

「ほー、ほつきちゃんねえ・・・可愛いのか？」

「うん！おとこっばいけどかわいいよほつきちゃんは！」

さつきから“ほつきちゃん”の事を話す一夏は楽しそうだった。好きなのか？と聞いたら好きって何？と予想外の返答がされた。しまった・・・一夏はまだ幼稚園だからそういう感情は理解できないのか・・・。

まあ、ゆつくりと教えていくか。

・・・それと一夏、女の子に男っばいとかはやめろ。って姐さんが言ってた。

「で？そのほつきちゃんの上の名前はわかるか？」

「ん、ん、ん・・・し、しの・・・しの・・・しののめ？」

「東雲？^{とうぐも}また変わった名前だな」

織斑も大概だが。

それより東雲と似たあの姓を聞くとなんか嫌なんだよな。
昔に世話になった剣道場の師範代の姓が似たような感じだったし。

何かと俺が師範代、ジジイの道場に入った頃から目の敵にされて毛嫌いされたし。

まあ・・・返り討ちにして全戦全勝だけだね。そのせいでさらに目の敵にされることになるんだが・・・。

「・・・まあいいや。ほうきちゃんと仲良くな？」

「わかった！」

話を切り上げて一夏と手を繋ぎながらマンションのエレベーターに乗る。

話しながら歩いているとすぐに着くもんだな。今まで、二人がいない間は家にいることが多いし、こんな風に話すこともなかった。

新しい日常、千冬と一夏と暮らす人生は新鮮で楽しいものだ。

二人はこんな俺を“父”と呼んでくれるのが嬉しく思う。

「おとうさん、ちふゆねえはまだかな？」

「もう帰ってるだろ。時間も四時回ってるしな・・・で？今日は何が食べたい？」

「ハンバーグ！」

「よしきた」

一夏は喋れるようになると“ねえちゃ”から“ちふゆねえ”と呼ぶようになった。

千冬も満更ではなく、千冬姉と呼ばれるのは嬉しいみたいだ。

まあ・・・それと同時に千冬も俺をお父さんから父さんと変えたから少し寂しい。

一回、パパと呼ばれてみたかった・・・。

「ただいまー！」

「あ。おかえり一夏、父さん」

「ただいま。早かったな」

「うん。今日は特に用事も無かったから・・・でも明日は委員会があるから遅くなりそうだよ」

「五時くらいか？」

「それくらいかな？もうちょっと早い気もするけど」

玄関まで迎えに来た千冬の頭を撫でながらリビングに入ると一夏は真っ先に冷蔵庫を開けてケーキをかぶりついた。

あの馬鹿め・・・！手を洗ってから食えと言ったのにそのまま食べやがって！

取り敢えずケーキを食べる一夏に拳骨をお見舞いする。

頭を押さえて踞る一夏を洗面所に首根っこを掴んで猫のように連れていき、手を洗わせた。

「いたい・・・いたいよおとうさん・・・！」

「黙れ。帰ってきたら手を洗えと言っただろうが。風邪をひいたらどうすんだ阿呆」

「うっ！りふじんだよー！ちふゆねえもそうおもっでしょ！？」

「・・・残念ながら一夏が悪い。父さんは毎日手を洗うように言っ
ていただろう？」

手を洗わせるとテーブルの椅子にそれぞれ座ると一夏は半泣きでケーキを食べ、千冬は学校からもらったプリントをズズイッと渡してきた。

えーっと・・・三者面談？またやるのか？

「それで父さん、面接はどうだったの？」

「開始五分で採用された」

「・・・なんで？」

「俺に聞くな」

「？」

千冬はマジかよ？みたいな顔をし、一夏はフォークを口にくわえたまま首を傾げていた。

まあそうなるわな。開始五分で採用なんて普通は不採用だと思うよな。

なんでだろうな？まさかとは思うが顔で選んだ訳じゃないよな？あの女性部長さんは。

俺の顔、童顔以外に特徴ないはずだぞ？

「・・・いやいや。カッコいい顔してるのにそれはないない」

「なんか言ったか？」

「なんでも。それより父さん？今度の日曜日に用事があるんじゃないのかった？」

「ん？実家に顔出す予定だがキャンセルしたからないぞ」

「・・・そ、それなら友達の家遊びに行つていいかな？」

「いいぞ。友達は大事にしないと・・・誰の家に行くんだ？」

「束つて同じクラスの女の子なんだけど」

「ああ・・・千冬がよく話していた束ちゃんか・・・」

束ちゃんとは千冬が付き合ってる友達らしい。

小学校なのに頭がいいけど孤立していたから話し掛けて友達になったとは千冬から聞いている。

前に遠足でオカズ交換したあの子だな。間違いなく。

・・・お父さん、優しい子に育って嬉しい。

友達が多い千冬だが、あんな風に楽しそうに話すのは初めてのため、仲良くはしてほしいものだ。

千冬の才能の影響か、友達はたくさんできるからなあ・・・特に下の子は千冬を“お姉さま”とか呼んでるのを先生から聞いた事があるし。

危ない教育されてる訳じゃないよな？

「気を付けてな。家に入ったらお邪魔しますはきちんと伝えよ」

「わかってる」

「おとうさん！おれもほうきちゃんとあそびたい！」

「・・・んー、また聞いておくよ」

住所や名前は知らないが担当の先生に聞けば教えてくれるだろ。

しばらく話すと俺は晩飯の用意をする事にした。

一夏も手伝いをしているため、エプロンをつけて一緒に料理中。

千冬はリビングのソファに座ってテレビを見ている。

だって・・・千冬が料理をすると暗黒物質ダークマターができるもの。
最初は頑張って教えたのだが、きちんと材料とかも調理も完璧な
のにできるのは暗黒物質。

こんなとこまで親父に似なくていいのに・・・と思う。
親父は料理や家事は壊滅的だったからな・・・。
反対に母さんは料理や家事は完璧であり、俺はそれを遺伝してい
る。

「ちふゆねえ、せなかからなにかでてる」

「・・・見るな一夏。俺でも見ていて辛い」

リビングでテレビを見る千冬の背中には年に似合わない哀愁感が
漂っていた。

・・・親父より秋枝の遺伝かもしれんな。あいつも家事は壊滅的
だったし。

涙を誘われるので千冬のハンバーグにはチーズを入れておこう。

案の定、嬉しそうにハンバーグを食べる千冬でしたとき。

第陸話（前書き）

修正しました。

第陸話

本日は晴天なり。

少し雲が出てきているが雨は降らないようなので洗濯物を干している。

今日は千冬に言われ、滅多に出ない外に一夏と外出している。

俺がとある会社の清掃員として働き始めて三週間ちよつと。

千冬は小学五年生、一夏は幼稚園に馴染み始めている。

まあ、一夏は月、火、木、金しか幼稚園には行かないが。

「おとうさん、ちふゆねえはいつかえってくるかな？」

「んー、もう少しじゃないか？時間的にもそろそろ学校は終わる頃だし」

俺は左手、一夏は小さな右手で手を繋いで歩きながら右手でポケットから携帯を取り出して時間を確認。

現在は午後三時半である。

「・・・迎えに行くか？」

「いく！あとなにかたべたい！」

「ならコロッケかなんかを食べ歩きするか。場所は・・・商店街のおっちゃんからもらおう」

「コロッケ！？おれ、だいすきなんだ！」

「おうおう。じゃあ行こうか。千冬の分も買つてな」

「うん！」

一夏は三歳。大体は喋れるようになり、歩くことも出来るようになったのでこうしてたまに散歩をするのが新しい日常になった。

散歩の途中にて食べ歩きをするのが一夏の楽しみになってたりする。

・・・千冬に言われてから外に出るようにしたらまたもや体重が増えた。原因は食べ歩き。

よくわからんが一般より少し重い体重になってしまい、絞るのに苦労した。

昔から親父に体重はなるべく減らしておけ。と非人道極まりない発言と肉体的用語による発言により、染み付いた習慣になりつつあった。

できるだけスピードが出るようにと、絞りまくったせいだな。うん。

千冬のおかげでもうそれは無くなったがまだ断食の習慣は直りそうにない。

「おとうさん？きいてるの？」

「・・・ああ、すまん。聞いてなかった」

「もう！ちゃんと聞いてよ！おれ、しょうらいはちふゆねえやおとうさんをまもれるヒーローになりたいんだよ！」

「ん。なれるんじゃないか？・・・親父の遺伝なら間違いなくチートな戦闘力ありそうだし（ボソツ）」

実際に俺は一夏の年、いや、五歳から才能の片鱗が現れたことがある。

本格的にそれが目覚め始めたのは遠足の熊戦。そこから急激に伸びて今じゃ、親父に次ぐ人類最強なわけだ。

一夏はぶんぶんと怒っているようだがコロツケを買い与えて機嫌を直した。

「じゃあ行こうか」

「おー！」

親父、息子、移動

所変わって千冬が通う小学校の校門。一夏と手を繋ぎながら待機。

「・・・ちふゆねえ、まだかな？」

「もう終わってるはずだからもう少し待てば来ると思うよ」

もむもむとコロッケを食いながら千冬を待つ親父と息子。視線がバシバシ感じます。

「・・・あ！ちふゆねえだ！」

「ん？」

時間にして七分待っていると校舎の玄関から千冬と変わった髪色の少女が出てきた。

「・・・？千冬、なんか嫌そうな顔してるな？どうしたんだ？」

「……おとうさん、あいつだれ？」

「……なんだあのガキは……」

千冬と少女は足早に玄関から出てこちらに歩いてくるが後ろからニヤニヤとここからでもはつきりとわかる気持ち悪い笑いをしたガキが追い掛けていた。

……取り敢えず殺すか。

「おい千冬！」

「！……父さん？どうしてここに……一夏まで」

「どうしたんだ千冬？こいつ、お前の知り合いか？」

「あゝ？ガキ、年上には敬意を払え。親から教わらなかったのか？」

千冬を呼ぶとランドセルを持ち直して少女と走つてくると後ろからまたもやガキが追い掛け、俺を指差しながら千冬になれなれしく話していた。

千冬も少女も嫌そうにしてるのがわからないのかこのガキは？

一夏を肩車すると千冬の手を取ってそこから離れるように歩き出す。

千冬は少女の手を取って歩くがガキが回り込んで邪魔をしてきた。

「おいオッサン、俺の千冬になれなれしくてんじゃねえよ。てめえ、誰だ？」

「・・・喧嘩売ってんのかクソガキ。年上には、敬意を、払えと、親から、教わらなかったのか？あんまりしつこいとお前の親に話すぞ。うちの千冬をつけ回してるってな」

「はっ！嫁と話していて何が悪いんだオッサン？俺は選ばれた者なんだから何をしようと勝手だろうが」

なんなんだこのクソガキは・・・！いいよな？殺してもいいよな？親もろともぶっ殺していいよな？
プルプルと震える手を見た千冬が慌てて止めるが止めるな。殴り殺してくれる。

「おいオッサン。その手はなんだ？俺を殴っていいのか？俺は“如月コーポレーション”の御曹司だぞ！！」

「・・・如月コーポレーション？・・・あいつの息子か・・・」

目の前でドヤ顔をしてるクソガキを無視して顔を改めて見てみる。
・・・似てない。金髪に黒と赤のオッドアイだなんてまるで似てない。養子を引き取ったのか？

如月コーポレーションとは日本有数の大会社のひとつではあるが、残念ながら四季組の下にある会社である。

その社長とは親父を通して知り合いのため、顔は知っている。

・・・さて。如月コーポレーションの御曹司と言っていたが四季組組長息子である俺の方が立場は上。どうしてくれようか・・・。
取り敢えず潰す。教育してないガキもろとも路頭に迷わせようか？
あん？

「父さん、もういいから行こう。こんな奴を相手にしても時間の無駄だよ」

「・・・同感だな」

いまだにドヤ顔をするクソガキを押し退けて一夏、千冬、少女は学校から離れる。

「おいオッサン！俺の千冬に手を出すなと・・・」

「ああ、クソガキ。自己紹介がまだだったな・・・」

ガシッとクソガキの頭を掴むと顔を覗いて低い声で脅すように言う。
う。

「織斑春樹。千冬の父親だ・・・次に千冬に近付いたら・・・わか

ってるな？」

「なっ・・・！？千冬に父親はいないはず・・・ぶべっ!？」

クソガキを離すと尻餅をつく。

その間に三人を連れてそこから離れると通学路を真っ直ぐ通り、
帰路につく。

「なんであんなクソガキと会ったんだ？」

「知らない。転校してきた時からなれなれしくしてきたから」

「・・・なぜ相談しなかったんだ？」

「最初はただ単に話をしたいだけだと思った。でも転校して二週間
経つとあんな風にエスカレートしたんだ・・・」

帰路、商店街を通る道で俺は千冬から話を聞いている。

あのクソガキは二ヶ月前に転校してきたようで千冬を見た時から
何かとつけ回したりしているらしい。

取り敢えずそれを学校側に電話しておいた。

仮に如月コーポレーションから圧力が掛けられても潰すから問題
はない。

後悔しろ。俺の子供に手を出すやつは皆殺しにしてみよう。

「それで・・・君は千冬のお友達かな？」

「うるさいよ。ちーちゃんの父親だからって気安く話しかけるな」

ビキッ

千冬の隣を歩く紫色の髪をした少女に話しかけると拒絶される。
罵声はプラスアルファ。

「束！ごめん父さん、束は人見知りが激しくて・・・」

「イインダイインダ。オレハオコツテナイカラネ？」

「おとうさん、なんかへん」

「ナニカイツタカイチカ？」

「なんでもありませんぐんそう！」

ピシッと敬礼する一夏。失礼だな・・・俺はイツモドリダゾ？
千冬は紫色の髪をした少女に何かを話しているが、俺とは違ってしっかり話を聞いていた。

・・・なぜだ。千冬の才能^{チート}の毒牙にやられたのか？

「いいか束？いくら束でも父さんを馬鹿にしたり、無下にすること

は許せない。私は父さんが好きだし、尊敬してるからな」

・・・千冬、父さんは嬉しくて涙が出そうです・・・。
今日はシースーだ。特上のシースーを注文しよう。

「・・・あいつが・・・ちーちゃんを・・・」

「む？どうした束？」

^{たはね}
束と呼ばれた少女は俯いており、千冬が話し掛けるとガシツと肩を
掴む。

髪が垂れてるため、顔は見えないがこれを俺は知ってる。

姐さんの病みモードの空気だ・・・。

と、トラウマ・・・トラウマがああああああつ！！

「た、束？痛いんだが・・・」

「ちーちゃん」

「いつ・・・」

「束さんはね。ちーちゃんが大好きなんだよ。他の奴なんてどうで

もいいくらいにだよ？あ、篝ちゃんは別だよ？束さんにはちーちゃん
んと篝ちゃんがいれば地球が滅んでも人間が死んでも構わないんだ
よ？あ。でもそれじゃあ地球には住めないね。ちーちゃん、束さん
と篝ちゃんと宇宙に行こう。誰もいないちーちゃんと篝ちゃんと束
さんだけで一生一緒に暮らそう！できたらちーちゃんの子供も欲し
いな。男の子はいらない、女の子が二人欲しいよ。あ、大丈夫だよ。
ちーちゃんの愛があれば束さんは妊娠できるからね！んー、少しだ
け待ってて。束さん達が学校を卒業するまでには宇宙船と人類を滅
ぼすウイルスを作るから。でも核もいいかもね。それなら綺麗さつ
ぱり消えるから・・・ウフフフ。ちーちゃん、君は・・・束さん
だけのものだよ・・・？」

・・・百合か？なんか姐さんよかは軽い感じはするな。

「お、おとうさんこわい・・・！」

「ああ大丈夫大丈夫。怖くない怖くない」

束ちゃん・・・だったか？見事に歪みに歪んでるな。

姐さんの病みモードもあれだがこの子も似たり寄ったりだな。

まさかこの年でヤンデレとは・・・千冬の将来真つ暗だな。

友達がヤンデレとか波瀾万丈の人生しかないぞ。これ、経験者の
アドバイス。

「だからね」

「……ん？」

束ちゃんは俺の目の前に立ち、狂気を孕んだ虚ろな目で俺を見つくる。

……似ている。かつての俺のように世界から認められなかった（……）時と同じ目をしている。
そして……母さんから絶望してた俺の目と。

「お前を殺して……ちーちゃんをもらうよ」

ならば……俺は親父にしてくれたようにこの子にも見せようか。

例え、どんなに人と違うことはあれども、みんな一緒だってことをな……。

「……面白い。俺相手にそこまで言うとはな……いいぜ。相手になってやるよ……“束^{たはね}”」

「気安く名前を呼ぶな！ちーちゃんに呼ばれるためだけにある名前なんだ！」

「と、父さん！？」

「心配するな。俺の事は知ってるだろ？死にやしないさ」

これが・・・後に世界を変える天才科学者となる“篠ノ之束”しのののたばねとの出会い。

ファーストコンタクトは最悪だが、将来には“天災コンビ”と言われるのはまだ先。

そして“天災夫婦”とも言われ、娘や乙女に命を狙われるのもまだ先。

第漆話（前書き）

修正しました。

第漆話

本日は雷鳴轟く嵐の日なり。

外の空は雨と雷がどしゃ降りで出られず、家にいる奴もいるだろ
う。

ニュースでも台風って言って警報が出ており、外出は控えるよう
にと放送されてる。

そんな中、俺は・・・。

「あああつ！またやられたかつ！」

嵐の中、港にあるコンテナなどがよくある倉庫の中に頭を掻きな
がら立っていた。

周りにはここらを縄張りにする不良達が倒れている。

こんな状況になっているのは彼女、束の仕業である。

彼女と出会い、宣戦布告されてから早五ヶ月。彼女にあらゆる襲
撃を受けている。

十一月に出会ってから五ヶ月が過ぎたため、千冬はまたひとつ年
を取った。

今月は四月。だがそろそろそれも終わりそうである。

「・・・取り敢えず帰るか。懲りたらもうシャブ（覚醒剤）なんか流すなよガキ」

「うう・・・くそが、てめえ・・・誰なんだよ・・・」

「名乗る必要はない」

そう言つと倉庫の大きな扉を開けて嵐の中に立つ。

彼女はあらゆる手で俺を亡き者にしようとし、今回は覚醒剤をばら蒔くグループを挑発して俺を殺すように仕組んだ。

返り討ちにはしたが。今回でこのような手は七十八回目である。毎回毎回彼女が誘拐されたと嘘をついて倉庫や廃ビルに行くようにするような事を思いつく彼女の頭脳は凄いな。

・・・そのせいで鈍っていた体を鍛え直されたから全盛期の実力が戻り始めている。

ん？どれくらいかって？取り敢えず大型車を殴り飛ばせるんじゃないか？

全盛期には戦車を素手で破壊できたから鈍りに鈍りまくったな。うん。

嵐の中、走りながら飛んでくる街路樹を蹴り飛ばしたりする。

「・・・俺もお人好しだな・・・嘘だとわかってても動くからな」

ため息をつきながら自宅を目指して走る。

つーか雨凄いな。ジャングルのスコールみたいだな。

・・・懐かしいな。親父に連れられて鍛えた時もジャングルには行ったな・・・おかげで半端ないサバイバル技術が身に付いたけど。

他にも気絶してる間に親父にイカダに乘せられて太平洋に放置されたこともあったな。

・・・鯨、怖い。

「ただいま」

「おかえりおとうさ・・・わわわっ、おとうさんびしょぬれ！ちふゆねえー！」

「なんだ一夏、今私は・・・と、父さん！？なんでびしょ濡れなんだ！？一夏、タオルタオル！」

「わかったー！」

「あ、ストップ。風呂に入るからいい」

家、マンシヨンの自宅に帰ると案の定、千冬と一夏は慌てたようにバタバタと走り回る。

それを苦笑しながら見てびしょ濡れになった靴を逆さまにしてぶら下げて乾かす。

ダバーツと水が流れ出て玄関に水溜まりができた。

びしょ濡れのまま、風呂場に向かうと廊下に水が溜まっっていく。それを千冬と一夏が拭こうとするが自分でやると言い、脱衣場に濡れた服を全部脱ぎ、洗濯機に放り込んで風呂場に入室。

温かいシャワーを浴びながら今日の出来事、彼女について考える。

彼女・・・束は頭がいい。それも同年代より遥かに、大人よりもそのせいで友人や身近な同年代の子と距離を置かれてるのかもしれない。

実際に千冬から聞くとクラスでも孤立しているらしいしな。いじめもあったようだし。

人は自分と違う他人を毛嫌いする性質があるからな・・・束もそれに当てはまるのだろう。

・・・似ている、な・・・昔の俺に。残酷なほど、切ないほど、何もかもが、全てが俺が悩んだあの日と。

「・・・親父・・・俺はあの子を助けられるだろうか・・・」

かつて親父と姐さんが助け出してくれたあの日・・・母さんが死んだあの日からの地獄から。

母さんは生まれつき、体が弱かった。

でも心は強かった。親父はそこに惚れたと言っていたが今思えば母さんほどの女性は今まで見たことがない。

俺はそんな母さんが好きだった。気高く、優しい母さんが。そんな母さんに甘えた俺は信じられなかったのだろう。

母さんの突然の死。

死因は教えてくれなかったが体が弱かったせいで死んだと舎弟から聞いた事がある。

まだ四歳の俺は信じられなかった。母さんの部屋で顔に白い布を乗せられた母さんが寝ているのは。

子供ながらに俺は理解してしまった。

母さんは・・・もう帰ってこないと。

それが信じられなくて、嘘だと思いたくて泣いた。延々と泣いて暴れて・・・。

その日から俺は誰も信じられなくなった。
部屋に閉じこもり、飯も食わずにずっと。

親父や舎弟の皆は何かと手を尽くしてくれたが俺は母さんの死が受け入れられなかった。

「・・・なんで俺はあんなに塞ぎ込んだんだろうな。親父や姐さんもいたのに」

苦笑しながらシャワーを止めると風呂場から出てタオルで水気を拭く。

千冬が一夏が用意したのか、着替えがあり、それをズボンだけ着るとタオルを肩に掛けてリビングに入った。

「あ、出た・・・父さん！ちゃんと服を着てよ！」

「いいじゃねえか別に。風邪をひくわけじゃないし」

何かを読んでいた千冬は顔を赤くして服を着ると言ってきた。前までは一緒に風呂に入ってたのにな。と思いながら冷蔵庫からビールを取り出して一息で飲んだ。

あの日が変わり始めたのは姐さんと出会った日からだったな。

『やあはじめまして。君が春樹くんかな？ボクは　。よろしくね？』

そう言っ　て姐さんは笑いながら握手をしてきたが当時の俺は気に入らなかった。

その笑顔が、母さんとダブったから・・・。

俺は拒絶し、姐さんを殴った。

でも姐さんは殴られても止めようとはせずにただ俺に殴られ続けていた。

『フッフ・・・君がボクを殴って気が晴れるならいくらでも殴られてやるさ。君のお父さん、冬君に頼まれたからね』

そう言う姐さんにまたも母さんがダブリ、辛くなった。

部屋からは出なかったがその時は怖くて、母さんがいなくなるような気がして家から飛び出した。

無我夢中に飛び出したため、迫りくるトラックに気付かず走っている姐さんに助けられた。

最初は何があったかわからなかったが姐さんが俺を抱きながらコンクリートの地面に寝ていたのを見ると親父達が駆け寄ってきたのを見た。

・・・そういえば親父のやつ、トラックを海に向かって蹴り飛ばしてた気が・・・。

後から聞いたらあのトラックの運転手、俺を狙った刺客だったみたいだが・・・。

と、とにかく！姐さんは頭を少し打っただけで命に別状はなかった。

簡単な検査で退院した姐さんは真っ先に俺のところに来た。

『春樹くん、君は大丈夫だったかい？怪我はなかったかい？』

その時の姐さんは俺が最後に見た母さんの優しい笑顔をしていた。

それで感極まって俺は思いつきり泣いた。枯れたと思った涙を流した。

姐さんは何も言わずに俺をあやしてくれ、それに甘えた。

まあ・・・それが俺が体験したこと。

彼女、束は俺とは違うが似たような苦しみを持っているだろう。

母さんという支えを失った俺、本当の支えがない束。似ている。あの様子から、両親から愛されてないかもしれない。

「それより父さん、何してたの？こんな嵐の中で傘も差さずに」

「傘は飛んだし、仕事があつたし。お前らは休みでいいな・・・というわけで八つ当たりで今日の晩飯はゴーヤチャンプルーオンリーだ」

「えゝ！またあのにがいの！？」

「理不尽だぞ父さん！せめてご飯を付けてくれ！」

「おかゆな。おかゆ」

ギヤーギヤー叫ぶ千冬と一夏をにやにやした顔で見ながらテレビをつけてみた。

嵐の影響か、見にくかったがニュースは見れた。

『怪奇！湖を走る女性！？』

「・・・なんじゃこら?」

「えー、こんなのよりあいぼう! あいぼうがみたい!」

「人が湖を走るのか・・・? そんなの父さんくらいじゃないのか?」

「千冬、お前はゴーヤチャンプルと納豆を混ぜたものを食べ」

「ごめんなさい。私が悪かったです」

深々と頭を下げる千冬。そんなに嫌か。親父はそんなゲテモノ料理を俺に食わせたことがあるんだぞ。

『あ、これです! これが湖を走る女性です!』

「どうせCGだろ。こんな悪戯を誰が信じるんだ馬鹿野郎」

「・・・でも父さんならできるよね?」

「むしろ海を走れるぞ俺は。密漁船を沈める時にやったことがある」

沈黙する千冬に訳がわからないといった一夏。

俺は二本目のビールを飲みながら再びテレビを見るとその女性がインタビュ―された映像が映し出され・・・。

『やつほー。春君、元気かなー?』

「ブ

ッ!」

「うわっ!」

「ひゃっ!」

そこに映し出されたのはさっきまで思い出していた姐さんだった。それを見た俺は口に含んだビールを盛大に吹き出した。

な、な、な、な、な、なんで!?!なんで姐さんがテレビにつ
!?

・・・よくよく見ると映像提供ロシア某局と書かれていた。
まさか姐さん・・・ロシアでまたやったのか(・・・・・・・・)?

『春君、元気かな?できたら連絡ほしいなー!ボクに君の声を聞かせて?』

『・・・あの、誰ですかこの人は?』

キャスターが戸惑うが仕方ないだろう。

姐さん、別名は“理不尽女王”だからな。下手に干渉すると心が
へし折られるぞ。

前に俺に手を出した敵対組織の刺客がどれだけ心が折れたか・・・。

テレビには昔、最後に会った時から変わらない姐さんの笑った顔が映っていた。

・・・不老不死かあの人。俺より十以上年上のはずだぞ。
なんで二十歳から顔が全く変わってないんだよあの方は・・・親父もだがなんで姐さんも化け物^{チート}なんだ？

「おとうさん、しりあい？」

「・・・うむ。正確には親父の知り合いで昔に世話になった人だ」

「お祖父さんの？父さん、でもあの方は二十歳前後に見えるけど」

「あれで十三歳年上だ。俺よりもな」

ピシッと固まる千冬。一夏は相変わらずのほほんとホットミルクを飲んでいた。

姐さん・・・偽名だらけでわからんが俺に名乗ったのは安心院なじみ（あじむ なじみ）だったか？

変な名前だが、前に

『ボクの事は親しみを込めてなじみさんと呼びなさい。もしくは妻と・・・』

『なんでやねん』

・・・あつたな。うん。こんなことが。
確か・・・さ、さ、さ・・・なんだっけ？とある対暗部用暗部の十六代目の当主だった気がする。

なんだが都市伝説では姐さんはその暗部の創始者で初代当主って噂があるが・・・どうだろ？

親父にひけを取らない戦闘能力、よく回る頭、絶大なカリスマ・・・それが姐さんである。

なじみさんと昔は読んでいたが姐さんと変わったのはとある舎弟から聞いたことで呼び始めたのである。

・・・まあ、とある舎弟Aは姐さんに折檻されて入院したが。

何を隠そう、俺のファーストキスは姐さんに奪われたのである。
小学五年生にご褒美に軽いキスをするはずだったが姐さんに舌ま
で入れられて喰われる一歩手前だったと記そう。

親父に助けられなかったら大切な何かとお別れをした気が・・・。
くそう・・・ファーストキスは好きな人に捧げようと思ったのに・・・と悔やんだ。

姐さんは好きだが、ファーストキスを無理矢理奪われたから・・・微妙。

「・・・どういう関係なの？かなり親しいみたいだけど・・・」

・・・そんなに睨むな。何を不機嫌になってるかは知らんがみたらし団子の串が折れてんぞ。

「さっき言ったがお世話になった人だ。母さんが死んでからは母親代わりをしてくれてた」

「・・・ふーん・・・本当？」

「・・・なぜ疑う？そりゃあ、ファーストキスの相手は姐さんだが・・・」

バキッ！

「ひえっ！？」

「・・・おい千冬。したんじゃなくて無理矢理された（・・・・・・・・・・）からな？俺からは一切してない」

「・・・ふ、ふふふ・・・こいつは敵敵敵敵・・・」

折れた串を握りながら千冬はぶつぶつと呪詛を唱えながらテレビの姐さんを睨んでいた。

・・・束もそうだが千冬も大概ヤンデレだな。どこで育て方を間違えたんだ？

延々と呪詛を唱える千冬に怯える一夏と晩飯を作ることにした。

その途中で束からどうやったのか、俺の携帯にメールが送られ、脅迫じみた内容が書かれていた。

死ね蛆虫とか、ちーちゃんを汚すゴミがとか、さっさと死んでちーちゃんを渡してくれない？みたいな内容だ。

・・・そういえば束って名字何かな？知らないんだけど。

「え？束の？束は篠ノ之しんのおだけどどうかした？」

「・・・は？」

「あ！それぞれ！ほうきちゃんのなまえもそれだよおとうさん！」

「・・・し、篠ノ之・・・？千冬、一夏、マジでか？」

「「うん」」

・・・うわぁ・・・東雲じゃなくて篠ノ之・・・あの馬鹿の娘だよ！

・・・ってことはあの人の孫・・・理解した。生まれるべくして生まれたんだな。彼女は。

「・・・一夏、会いに行くぞ」

「え？」

「篠ノ之なら俺も知ってるからな。挨拶するついでに束の話を聞きに行こう」

「父さん？なんで束の名字でそんなに慌てるんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

篠ノ之んとこの先代、つまりは束の祖父なんだが・・・俺の、剣の師匠なんだよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

てなわけで篠ノ之家、篠ノ之神社に行くことになった。

あの馬鹿（柳韻）から聞かにならん。あいつ、子供は大切にすると思ってたんだがな。

結果次第では躊躇いもなく柳韻を殺してしまうかもな・・・。

・・・今日の夢に姐さんが出てきて喰われそうになった。
鬱になって死にたくなった。

第捌話（前書き）

修正しました。

第捌話

本日は晴天なり。

季節外れの台風も去り、嵐も嘘のように過ぎ去った。
雨が降ったせいか、少しジメツとしていたが特には気にならなかった。

「・・・おとうさん、ここどこ？」

「篠ノ之神社。懐かしいな・・・かれこれ親父が死んでからだから・・・十二年か。何も変わっていないな」

現在、我ら織斑ファミリーはとある神社に来ている。
名前は“篠ノ之神社”。昔に修行していた時に住んでいたことがある場所である。

今日は束に会うためと一夏の言う“ほうきちゃん”とやらに会うためにここに来た。

あのジジイ、まだくたばってないかな・・・。

「お。ここだここだ」

「・・・道場？大きいね」

「まあな。かなり昔に建てられた武家屋敷を改装したらしいから広いのは当たり前。さ・て・と・・・・」

神社の裏。少し分かりにくいがそこには木の扉があり、そこを開けると庭があり、その先には道場があった。

千冬と一夏ははっと感心する。

その間に俺はゆっくりと道場に近付くと中から僅かな音が聞こえる。

なるほど・・・練習中か・・・好都合だな。

ニヤリと笑うと千冬と一夏に待機するように言う。

でもついてくる。と言うので何があっても手は出さない、口は出さないと約束をした。

「んじゃ・・・たのも~~~~~~~~!!」

ドゴオンッ!!

「えゝ!?!」

「わっ!?!」

「お邪魔します。道場破りです!」

道場の扉を蹴り開けてずかずかと中に入る。

中に入れば袴を着た男女が竹刀を持ったまま固まっており、俺は靴を脱いで跨ぐ。

キョロキョロと見渡すと、壁側に苦虫を潰したような顔をする渋いイケメソがいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・お前か春樹・・・」

「ういつす！柳韻、元気にしてたか？」

現在進行形で苦虫を万単位で食い潰したような顔をするイケメソは腕を組みながら俺を嫌そうに見ていた。

そいつの名は篠ノ之柳韻^{しののりゅういん}。篠ノ之神社、道場の現師範代である。

「お前は昔から変わらん。二十歳の時からまったく老けてない」

「体質だ。親父も似たようなもんだろ？」

「・・・まあいい。何をしにきた春樹？」

「道場破り。てめえがどれだけ強いかと俺がどれだけ力を取り戻せるか知りたい」

「・・・・・・・・ふん。まあいい・・・積年の恨み、ここで晴らさせてもらっぞ」

「それ、負けフラグだから。俺、カッコいいと思ってるようだがカッコ悪いぞお前」

「・・・・・・・・殺す！！春樹、貴様は何も変わってないのか!？」

「変わったぜ？体重と好物が。酒とマグロに加えてケーキをプラスだ。あ、他には一夏と千冬が好きだ」

「ぐっ・・・・・・・・貴様あ・・・・・・・・！」

「やるの？やんのか？やんのかゴラ？てめえ、一度も俺に勝てなかったくせにいきがんじゃないやねえぞ柳韻」

「は、春樹iiiiiiiiiiiiっ!!」

「あ。千冬に一夏、下がってな」

「ぼかーんとしている千冬と一夏を壁まで押してやると木刀・・・・ではなく真剣を持った柳韻がこちらに向かってきた。

「いいねえ・・・・・・・・達人の殺気、それは衰えていた俺を目覚めさせる・・・・・・・・」

「はああああああああっ!!」

「楽しませてもらっぜ柳韻!」

「あ、いちか・・・あのひとは?」

うらあつ! 親父直伝のラリアットオ!!

ぐっ・・・!

「あ! ほつきちゃん! おれのおとうさんだよ! まえにはなしたよね?」

「うん・・・すごい、さわがしいね・・・」

なんかスゴいパンチ(右ver)!!

ドッゴオオオン！！

ぐぬおっ！？道場の壁に穴が！？

「ちーちゃん！東さんに会いに来てくれたの！？」

「東・・・ほら。父さんだよ、なんかお前の父さんと知り合いみたいだぞ？」

「・・・あの腐れ野郎が・・・」

チエストオオオオオ！！

なんの！織斑家必須科目『指で真剣白刃取り』！！

カッキイイイン！！

な、なんだと！？

ウイイイイイハアアアアア！！

ぐばあっ！！

「え？いちかのおとうさんとちちつえはしりあいなの？」

「ああ。父さんは君のお祖父さんの弟子と聞いたんだが・・・」

「じいさまの？あの、あなたは・・・」

「あ、すまないな。織斑千冬、一夏の姉であの人の娘だ」

「は、はじめまして・・・しのののほうきっていいいます」

親父直伝！『手刀で何もかも叩き斬れ』！！

ズッパアン！！

や、やめろ春樹！道場が崩れる！！

ふはははははは！！なんか楽しくなってきた！！

「おれ、おりむらいちか！おねえさんは？」

「・・・君、ちーちゃんの弟？」

「うん！ちふゆねえがいつもお世話になってます！」

「・・・うん。君はいいかな？私は篠ノ之束。束さんと呼ぶがいい
いっくん！ぶいぶい」

篠ノ之流古武術奥義・・・

させつかあ！織斑家必須科目『妙に痛い目潰し』！！

ズブツ。

ぐぎゃあああああああ！？目が！目があああああああ
あつー！！

「・・・つよい・・・いちか、いちかのおとうさんつよいね・・・」

「うん！まえにくまをなぐりころしたっていったよ！」

ドッゴオオオオン！！

おらおらおらあ！！柳韻、弱くなったんじゃねえのか！？

ちょ、まつ、ちよつと待て春樹！

「・・・ちちつえ・・・」

「気にするな篤ちゃん、父さんはあんな感じだから気にしたら負けだぞ・・・はあ・・・」

「ちーちゃん・・・やっぱり殺そう。指名手配させて世界から狙われるように・・・ぶつぶつ・・・」

ランインパクト!!

著作権が・・・ぎゃああああああっ!?

ズドオオオオン!!

「・・・いつまでやるのだ父さん・・・」

「おー!すごいおとうさん!てからビームがでた!」

「ええ・・・?」

最後!親父直伝裏奥義!『シャイニングウィザード改』!!

あべっし!!

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あっはっはっはっは！悪い悪い！ついやりすぎたわ！」

「春樹貴様あ！道場の修理にいくらかかると思ってるんだ！？」

柳韻との模擬戦、もとい俺のワンサイドゲーム終了後、道場は穴だらけになっていた。

他にも門下生数名がラ　ンインパクトに当たり、ボンバーアフロになっていた。

最大の被害を受けた柳韻は軽く頭に包帯を巻いて道場の無事な床に座って俺を睨んでいた。

当の俺は爆笑しながら柳韻の肩をバシバシ叩いているが。

その近くには千冬に束、一夏に篝ちゃんが道場の穴が開いた場所をつついたり、残骸を持っていた。

「・・・お前、体力が落ちたな？昔ならもつと鋭い動きができるだろっ？」

「あー、お前にはわかるか・・・“氣”の操作も下手になったし」

「まあ・・・今までサボっていたツケだろ。なのにあの戦闘能力・・・化け物め」

「その化け物と戦ってその程度で済むお前もお前だからな？」

不良やヤクザ相手に暴れたから勘は戻ったが体力等はまだ微妙な感じである。

ラインパクトは某野菜少年が主人公の筋肉バグキャラの技だが、“氣”を使うからな。

昔なら本気でやれば駆逐艦を消し飛ばせたが本当に衰えたな。

柳韻は真剣を鞘に納めながらため息をつく。

んだゴラア・・・殴り殺してやろうか。あん？

「春樹・・・もう大丈夫なのか？」

「・・・ああ。親父が死んだのは仕方がないと振り切ったよ。くよくよしてたら親父に殴られるからな・・・それにガキもできたからな」

「・・・信じられんな。あの春樹が子供を持つとは・・・昔から子供に好かれていたが・・・」

なんでこう、昔からの友人は信じられないみたいな顔をするんだ？

子供は昔から好きだし、好かれていたし。だから何の問題はない
だろ？

少し大きめの竹刀を持つ千冬、箒ちゃんが使っているだろう竹刀
を持つ一夏を見てみると柳韻もまた、二人を見ていた。

視線に気付くと千冬は軽く微笑み、一夏は満面の笑顔で竹刀を持
ちながら手を振っていた。

それを微笑ましく見ながら手を軽く振り返した。

「父親らしくしているな春樹。かなりなついているじゃないか」

「まあな。可愛くて堪らん。邪魔するやつを二分で消し炭にできそ
うだかな」

「……………昔みたいに山を消し飛ばすなよ？」

「善処する。あれは仕方がないだろ」

「……まあ、昔にちよつと……ね。俺も若かったと言っかなん
と言っか……。」

「それより柳韻。てめえに聞きたいことがある」

「なんだ？そんなに改まって」

「お前の娘、束の事だ」

ピクツと眉が動いたのがわかった。

柳韻は真剣な表情で目を閉じると何かを考えるような仕草をする。持っていた真剣も床に置いて腕を組むと言いつらそうに口を開く。

「・・・束は生まれた時から剣の才能が無かった。代わりにあり得ない頭脳を持って生まれた」

「確かにな・・・あの年であの頭脳は異常だ。響と渡り合えるほどの、な・・・」

「・・・やはり、か・・・」

「で？てめえはいつたい何をしてるんだ？束があそこまで歪んでるのはてめえのせいでもあるんだぞ？」

柳韻は千冬に抱きつく束を見る。

織斑家同様、篠ノ之家もまた昔から存在する由緒ある家系。

最初は神社の巫女としての家系だが、いつからか“篠ノ之流古武術”を編み出した時からそれは変わり、剣術家として変わった。

最初、織斑家と篠ノ之家は犬猿の仲だったが、俺の親父と柳韻の父親、篠ノ之総蔵しののそうざんの代から仲良くなった。

親父曰く、根性を叩き直したらなんか仲良くなった。らしい。

ジジイから剣を教えてもらったが、やはりどこか、才能の有無で

差別のようなものはするのだろう。

子供は鋭いからそういう感情には誰よりも早く気付く。
それを知ったからこそ、束は歪んだのではないか？

篠ノ之家に生まれたのに剣の才能は皆無。代わりに響と並べるような頭脳を持って生まれた。

嫌わない方が難しいだろう。だが、俺はそれすらも受け入れられる。

・・・親父がそうしてくれたように。

「てめえは馬鹿か？自分の娘と接するのに避けてどうするんだよ。子供は勘がいいからすぐにわかるぞ。嫌われてることくらいな」

「わかってる。わかってるんだが・・・どうしても考えるんだ。なぜ、あの子はあんな風に生まれたのか・・・って」

「・・・見損なったぜ柳韻。てめえがそんなクズだったとは・・・昔は背中を預けられる親友だと思ったんだがな・・・」

「・・・っ!」

「話は終わりだ。もし、束との接し方を違^{たが}えるようならば・・・俺はお前を殺す・・・!」

昔から衰えてない殺気を柳韻にぶつけながら、忠告をする。
・・・時が経てば人は変わるというが、変わらないでほしかったな・・・。

「・・・帰るぞ千冬、一夏。話は終わったからな」

「え？あ、うん。わかったよ父さん」

竹刀を持っていた二人を呼ぶと、そのまま篠ノ之道場から出る。
去り際に、柳韻の耳にこっそり呟く。

「ジジイにも伝えとけ。もし、変わらぬようなら俺は篠ノ之家を破壊するとな・・・」

「は、春樹！お前っ！」

「自業自得だ。あの子を追い詰めたのはてめえらだ。てめえらがあの子に愛情を注いでやってれば歪みはしなかった・・・わかるな？」

「ぐっ！」

「・・・はじめまして。ほうきちゃん・・・でいいのかな？」

「あ、は、はい！」

一夏と同年のポニーテールをした少女に話し掛けると、静かに自己紹介をする。

この子が束の妹か・・・目が似ている。歪みとかは関係なく、どこか、似ているな・・・。

自分の名前を教えると、ほうきちゃん……篠ノ之箒しののほと挨拶あいさつを交わす。

「いい？君はお姉さんが好きだろ？」

「はい！ちょっとこわいけどじまんのおねえちゃんです！」

「うん……君はそのままでもいい。お姉さんを支えてやってくれ」

「……？」

「まだ、難しいかな？でも忘れないように。家族は、かけがえのないものだってね？」

よくわかってないようだが、箒ちゃんは花が咲いたような笑顔で頷いた。

頭を撫でてやると立ち上がり、千冬と話す束に近付く。

「……なに？今はちーちゃんと話してるんだ。お前に用はないから消えろよ」

「た、束！」

「……忘れるなよ。人は一人では生きられない。たった一人の肉親と親友だけではお前は間違いなく壊れる（……）ぞ」

「・・・っ！う、五月蠅い！五月蠅い五月蠅い五月蠅い！お前には関係ないだろ！束さんの事は何も知らないくせに！！」

「当たり前だ。ちゃんと話してくれないからな・・・辛いことがあれば、千冬に相談するんだ、俺は嫌なんだろ？千冬、お前になら束は本心を明かす。絶対に、束を“一人にはするな”」

「？よくわからないけどわかった」

「じゃあな」

最後にボンと頭を軽く叩いてやる。

払い除けるかと思いきや、抵抗がなかったのに少し驚きながら今度こそ篠ノ之道場を出る。

・・・少しは、付き合ってくれたらいいのにねえ・・・。

柳韻、二度とヘマはやらかすなよ。

お前は俺と同じ、父親なのだから・・・。

第玖話

今日の天気は晴れ。

雲もあまりなく、日光がさんさんと穏やかに照る、そんな日。
今日は祝日で休み。父さんと一夏と家におり、遊びに行く予定だったが・・・。

「ううゝ・・・げぼっげぼっ！」

「38、6・・・風邪ひいたの？」

父さん、風邪ひいたようだ。

いくらバグキャラでも風邪はひくんだねって実感したよ。

「ち、千冬・・・貴様、俺を化け物扱いに・・・げぼっ、したな・・・？」

「さ、さあ？ほら。薬を飲んで」

訂正。バグキャラは風邪ひいてもバグキャラ。
なんで心が読めるのかわからない。もしかして勘？

私はベッドの上で死んでいる父さんに薬を飲ませると頭に冷えピ

夕を新しく張った。

あゝと気持ち良さそうな声を出す父さんは普段の堂々とした態度とは真反対なので少し新鮮だ。

「ちふゆねえ、おとうさんだいじょうぶ？」

「・・・微妙だな。まさか父さんが風邪ひくとは思わなかったからどうなるかわからないな。今日は出掛けるのは無理そうだ」

「えー！ひさしぶりにキャッチボールしたかったのに！」

「あゝ、すまん一夏。埋め合わせはするから部屋かりビングで大人しく・・・げほっ、しとけ。風邪移したら大変、げほっだからな」

そう言う父さんはボスツと布団にくるまると目を閉じた。

・・・なんか少しだけ出てる顔が赤くて色っpげふんげふん！

「ちふゆねえ、かおがきもちわるいよ」

「・・・い ち か？」

「ごめんなさいちふゆねえ！！」

にこつと笑いかけると一夏はなぜか頭を下げ謝る。なぜ？

「（・・・無意識だとしたら姐さん以上の恐怖になりそうだな・・・頭痛い）」

「じゃあ父さん、私と一夏はリビングにいるから何かあったら呼んでね？」

「んー」

父さんはのろろと布団から手を出すと力無く手を振った。

本当に珍しい。父さんはほとんど風邪や病気にかかったことないって言うてたのに。

・・・ならない方があり得ないけどね。

それに、たぶんだけど風邪をひいたのは前の季節外れの台風の時かな？びしょ濡れで帰ってきて上半身裸でうろついていたから風邪になるのは仕方ない気がする。

シャワー浴びても意味ないよ父さん。

油断してたせいで風邪になるとか・・・。

「ちふゆねえ、いまからなににする？おとうさんはつごけないみたいだしね」

「二人で出掛けるのは駄目って言われてるし・・・私は父さんの看病するつもりだ」

「ならおれも！おれもかんびょうする！」

・・・迷うな。父さんをノックアウトした風邪だ。

一夏に移ったらとんでもないことになりそうな気がするな・・・
うーん・・・。

もしかしたら未知の病原菌かもしれないし・・・うむむ・・・。

取り敢えず一夏には雑炊が何かを作るのを手伝ってもらおう。

私はまだご飯を炊くこととお湯を沸かすしかできないし。

・・・今情けないと言ったやつ・・・斬り殺すぞ。

なぜかは知らんが失敗するんだよ！

「ちふゆねえ？」

「む。なら一夏には雑炊を作ってもらおうかな？私は作れない・・・
し・・・」

自分で言っただけなんだが地味に落ち込む。

男である父さんは料理が得意で女である私は苦手で一夏は上達している途中・・・なぜか腹が立ってきた。

これが世の理不尽というやつか・・・。

なぜ神は残酷なのだ！料理もだがなぜ私はむ、胸の成長が遅い！？

束は私達の中では巨乳と崇められるほどでかいのになぜっ！！

答える神ッ！！貴様は私が嫌いあああああつ！！

嫌いじゃないなら胸を大きくしてください！（必死）

・・・こほん。失礼、取り乱しました。

毎日朝に牛乳は飲むのだが束のようにたわわにはならん。なぜだ。束は胸がでかくなる魔法でも使っているのか？

千冬は同年代では大きい部類に入ります。

束が異常にでかすぎるだけです。

「わかったー！・・・でもちふゆねえ、りょうりできないんじゃ・・・」

「ぐはっ！」

一夏の何気ない一言により、私は胸を押さえて蹲った。

・・・父さんが言っていた無垢な子供のきつい、かつ何気ない一言こそ一番胸に突き刺さる。これ、本当のようだ。

だって一夏・・・首を捻ってなんで？みたいな顔してるもん。もし狙ってやってるのならアイアンクローで沈めてやる。

「と、とにかく！一夏は雑炊を作ってくれ！いいな！？」

「いえっさー！」

わーい！と言わんばかりに一夏は走りながら台所に行き、手を洗う。

それから鍋やら冷蔵庫から冷やご飯、卵、ネギを取り出すとまな板の上に置いた。

・・・はっ！？しまった！一夏はまだ一人で火は使ってはいけな
いんだった！

私は慌てて台所に行くと一夏と卵雑炊を作ることにした。
私はまだギリギリで火を使うことは許されているからな。

・・・だけど父さんがクイズミリ ネアの一千万の問題みたいに
私に火を使わせるのを悩んでいたのを思い出すと不安がある。
火を使わせるかってだけで二時間も考え込んでたし。

「（・・・以前に使って火事になりかけたのに気付けよ。どんだけ
慌てたと思ってんだバカヤロー）」

「あれ？おとうさんのこえがきこえたよ？」

「・・・父さんは寝ているんだぞ？声が聞こえるはずがないだろう」

一夏の将来が心配になってきた。

何はともあれ、雑炊ができたので一夏と父さんの部屋に雑炊を持
っていく。

父さんの部屋はマンションの一室の中で一番大きく、そこにはキ
ングサイズのベッドがあったりする。

・・・最初に聞いたなら「寝やすいだろ」って言ってたが・・・でかいぞ父さん。

逆に寝られるのか？私は普通に畳の上の布団がいいんだけど。

「おとうさんおとうさんぞうすいつくつたけどたべれる？」

「んー、もらうー」

のそのそと起き上がる父さんは何度も言っが普段とは違う様子なので新鮮すぎる。

なんかこう・・・弱々しい場面を見ると守りたくなるような・・・。

「まむまむ・・・」

「おいしい？」

「まずくはないぞ」

「・・・そこは美味しいって言いなよ父さん・・・」

一夏が雑炊を父さんに食べさせる（あーん）とまた布団にくるまり、爆睡し始めた。

・・・あれ？私がやるはずだったあーんは？

「・・・めずらしいねちふゆねえ。おとうさんがここまでよわってるのっではじめてじゃないかな？」

「確かに・・・だが今日はどこで寝ようか？」

一応、私達の部屋にもベッドはあるが、たいていは父さんのベッドに潜り込んで寝ている。

一夏はまだ小さいから父さんと一緒に寝てるけど。

・・・なんか、いい匂いがするんだよね。父さんは。

・・・この発言、私に変態みたいにならないか？

いい匂いがするのもそうだが、父さんと寝ていると安心感があるし、朝起きたらストレスとかゼロって素晴らしいオプション付きなのだ。

だから私は父さんと寝ている！ファザコンとか言われても構わん！
というか今のうちに父さんと寝ときたい！

「ねえねえちふゆねえ、いまからなにかしない？おとうさんねちゃっ
つたし」

「なら人生ゲームしよう！東さんが持ってきたやつ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・待て。今なんかいたぞ」

声がした方を見ると束と妹の箒がいつの間にか部屋に侵入していた。

・・・鍵は？確かマンションのオートロック機能、なかったか？

「束さんが破った！オートロックなんざ束さんの前では無意味無意味！」

「・・・・・・・・あ。もしもし？警察ですか？不法侵入者が・・・」

「わー！待つて待つて！束さんと箒ちゃんは呼ばれて来たんだよ！・・・そこに寝ているやつから！」

「・・・は？父さんが二人を呼んだのか？」

「遊ばないか？？みたいに言われたから来たんだぜ！ぶいぶい」

いえーい！とピースをする束、おどおどしながら束を止めようとする箒・・・。

どっちが姉かわからん。

それは兎も角。不法侵入した束を父さんが昔、使っていた竹刀で頭を叩いておいた。

痛みに悶える束を放置して父さんの脇にある体温計を抜いて見て

みる。

・・・37、8？え？早くない？まだ二時間くらいしか経ってないのに下がるの早くない？

・・・まさか、回復力もバグキャラ並？

医者泣かせだな。父さん。

「ちーちゃんちーちゃん！東さん達とゲームしよう！」

「だがな・・・私は父さんを看病しなければならないし・・・」

「ならこれ。東さん特製の風邪薬だよ。これなら少しは治りが良くなるよ」

・・・にしても。あれだけ父さんを毛嫌いしてたのに東は最近はよく関わるな。

最初は私が束の悩みを聞いたりしていたが、ちよくちよく家に来ては何かを話してたりする。

そして、たまに夕食を食べて帰ったりと家によく遊びに来る。

瓶の中にある透明な液体を父さんに飲ませた束はポンポンと布団に入る父さんのお腹を叩いた。

・・・本当に、何があつたのだろうか・・・？

「おお・・・束、これ。また読んでいいから。ただし、あまり荒らすな」

「そして、借りてもいいけどちゃんと返すように、でしょ？」

「・・・わかっていたらいいよ。本だけなら大量にあるしな」

「うん。ありがと・・・行こ、ちーちゃん」

束に手を引かれて父さんの部屋から出ると、父さんが使っているけど入れてくれたことがない部屋の前に来た。

そして、束は鍵を差し込んで鍵を開ける。

中にはまず、大量の本が入っている本棚が目に入った。

その本棚はその部屋の壁を埋め尽くすような、それだけの量が部屋にあった。

「こ、これ・・・？」

「あ、ちーちゃん知らないの？ここ、あの人の趣味部屋って言うんだよ。たまに借りて本を読ませてもらってるんだ」

本の背表紙を見ると、あらゆるジャンルの本があることがわかった。

医療関係、遺伝子工学、機械系の専門の本やら、父さんの趣味なのか、ガンダムやらアニメ関係の本もあるのもわかった。

・・・えー。父さんって本を読むのか？

「あ。それはね、なんかあの人の親父ってやつが生前に集めていた本を全部もらったらしいよ？形見だけど俺には理解できないものが

多いから、ってね？」

「・・・なんかわかる気がする・・・父さん、勉強苦手って言うてたし・・・」

「え？でもあの人は高校じゃトップレベルの学力があるって言うてたけど・・・？」

「待て待て待て。なぜお前が知ってるんだ？私は聞かされてないぞ？」

「・・・んー。まず人に知ってもらうなら自分を知ってもらわないとって言うてから色々、教えてもらってたんだよ」

・・・なんか束を殺したくなってきた。

仕方がないのはわかる。父さんが束と向き合うためにやってるのはわかるけど、なんか嫉妬してしまう。

私も知らないことを私の親友が知ってるのは・・・なんか辛い。たぶん、一夏も束ほど、父さんの事は知らないだろう。

一夏は箒とリビングのテレビでゲームをしてるらしいが・・・。たしか、マ オカートをやってたはず・・・。

「えっと・・・今日はどれにしようかな？」

「・・・遺伝子工学ってわかるのか？」

「うん。なんかわかつちゃうんだよね……でもあの人は気持ち悪がつたりせずに接してくれるんだよね……」

本を読む束はどこか、嬉しそうに見えた。

だからかな？父さんになついて（？）いるのは……。

……父さんの食事をたかりによく家に来るのは……まさか、ね……？

だとしたら束、お前は私の最大のライバルになりそうだな。
恋の……戦いの。私は負ける気はせんがな……。

「……今はそんな感情はないよ。まだ理解できないから……」

「そうか？……というかなぜ育児雑誌があるんだ？」

まさにカオスとしか言えないような部屋だな。ここは。
見たことがない本や持ち出し禁止とか書かれたモノまであるんだが……。

束は鼻唄を歌いながら本を何冊か抜き取ると重ねて部屋から出ようとしていた。

「おい？」

「ん？借りてもいいけどちゃんと返すようにって言われたからね。暇潰しに借りるんだ。学校で読めるし」

あの六法全書ってまさか父さんのか？

前に束が学校で読んでたタウンページよりも分厚い本は。

束は部屋に鍵をかけると、本をヨロヨロしながら持ち歩き、鍵を父さんの部屋の机に置いていた。

それから篝ちゃんに会うーと言う束とリビングに行くことにした。

しばらく、というか夕食を食べるまで家にいた二人は風邪が治った父さんに車で送られていた。

・・・新しい父さんをいくつも見れた日だった。

第拾話（前書き）

修正しました。

第拾話

本日は晴天・・・なり？

まだ暗いからわからないが天気はいいと思う。

現在の時刻は午前五時半。よい子の皆、サラリー戦士の方々は夢の中だろう。

お天道様はまだ顔は出していない。

「ふあああゝ・・・ねみい・・・」

「ほら父さん、早く行くよ」

「ういいい・・・」

「おれもねむい・・・」

我らが織斑家は午前五時半に起床、支度をして朝のランニングに出掛ける前である。

千冬が中学校の剣道部に入ると鍛えるとスタイル維持の両立で規則正しい生活を（主に俺に）強要された。

クソ眠い中、千冬に一夏と一緒に叩き起こされ、ジャージに着替えるのは嫌にイライラする。

実際に一夏はこっくりこっくり船を漕ぎながら隣をゆったりとしたペースで走ってるし。

「あ、おはようございます」

「どうも」

「おはようございます」

「うー、おはようございましゅ」

すれ違うランニングをする人に挨拶をしながら定番の川原を走る。微笑ましそうにおっさんは一夏を見ながら反対側に走っていった。

欠伸をかみ殺しながら隣と前を走る自分の少し大きくなった子供達をみる。

小学生だった千冬は中学校に上がり、期待の新生活として注目を浴びてほしい。

剣道部に入ったので、元インターハイ三連覇をした俺がたまに教えている。

篠ノ之道場にしようかと思ったが、ジジイがめんどくさいからやめておいた。

そして一夏は少しだけ背が伸び、そろそろ小学生になるかならないかといった頃。

・・・一夏の顔、親父の面影があるから懐かしく感じる。

しばらく走ると、軽く千冬と無手で修行をする。

竹刀や刀を振るにしても、まずは身体の使い方を知らないといけないからな。

「はあ！」

「はい残念。それは悪手だ」

「え？きやつ！」

その間、一夏は川原の石で水切りをしていた。
まだ竹刀は持てないし、戦えないから見学になる。

それから二十分ほどやると、再び来た道に戻るようにランニングをし、帰宅。

早起した束が我が物顔でリビングで寛いでいるのは気にしない。

「あつ、おつかえりい〜！」

「・・・お前、いつか捕まるぞ？」

「にゅふふふ」。束さんの力をもってすれば国家権力の狗なんざチヨロいチヨロい！」

・・・頭が痛いな。

軽く汗を拭いてから朝食の用意。

束と一夏も料理はある程度できるから手伝ってもらうが、千冬はシャワーを浴びている。

・・・朝食、まともなものになるな。千冬が参加すればやばいことになるし。

ま。そんなこんなで朝食を食べる。

今日はフレンチトーストで済ませ、糖分ゼロのブラックコーヒーを飲みながら新聞を読む。

・・・誰だ、新聞を読むのか？とか言った奴は？世間の情報を知るには新聞を読むのがいいんだよ。

「ほら千冬。弁当作つといたから」

「ありがと父さん。じゃ、行つてきます！」

「あー、待つてよちーちゃん！」

千冬と束は学校に行き、弁当を持参。

束も俺が作る弁当が気に入り、略奪するので仕方がなく作っている。

皿を洗うと、準備を済ませて一夏を幼稚園に送り、仕事に向かうことにした。

幼稚園の山田美弥先生と軽く話してから幼稚園を離れ、自転車で会社に出勤する。

「はよーございます」

「おや。今日は早かったね春樹君」

「はは。一夏が準備が早かったからですよ十蔵さん」

「はっはっは！父親してるね春樹君、私も子供が欲しくなったよ」

「いやいや、子育ても辛いですよ。一夏なんか最初は夜に泣いては疲れましたからね・・・」

会社に出勤すると、真っ直ぐに清掃員用ロッカーで着替え始める。そして、清掃員として働く会社への先輩に当たる轡木十蔵さんくわき じゅうぞうに挨拶する。

十蔵さんは笑いながら緑色の制服に着替えている。

本当に寝不足になりますよ。俺は働いてなかったからいくらかマシだったが・・・。

「今日も頑張りましょうか春樹君」

「うす」

午前九時、仕事開始。

今日もいつもと変わらぬビル内部を清掃することになった。

普段も変わらず、ビル内部を清掃したり、備品の補充したりするのが俺達の仕事。

たまに会社に届けられた手紙やら書類をそれぞれの部署に届けた

りもする。

時折、女課長に食事のお誘いがあるが、全て断っておいた。
うちには二人＋居候（？）みたいなのがいるからな。

「・・・春樹君、相変わらずモテるね」

「そうなんすよね・・・俺、結婚してないですからお見合いもかなり来るんですよ」

「（・・・ルックスも性格もいいのに勿体無いね。彼、結婚願望が皆無じゃないか・・・）」

「・・・なんすか。俺の顔に何か付いてます？」

「春樹君。結婚は早目にしないといい人が見つからなくなるよ？」

「ご心配なく。二人の子供が一人立ちできるようになって、なおかつ余裕があつたらしめますよ・・・たぶん」

トイレにてトイレトペーパーを投げながら補充すると十蔵さんは勿体無い勿体無いと呟いていた。

・・・結婚、ねえ・・・あんまりしたいとは思わないんだがなあ・・・。

「（本当に勿体無い。彼ほど謙虚な若者（？）はそうそういない。」

彼と結婚できたら一家安泰で夫婦の仲もいい感じになるのだがな・・・」

「・・・次は十七階の資料室の清掃ですね・・・そういえば十蔵さん、本業の方は（・・・・・）いいんですか？」

「ああ、そちらは妻に任せているから大丈夫だよ。さ、早く済ませましょうか」

「はい」

実は十蔵さん、会社の清掃員なんてやってるが実はこの会社の親会社の社長なのだ。

視察の名目で十蔵さんの経営する会社の子会社で清掃をしながら横領やら賄賂、セクハラについて調べてるのだ。

「・・・最初に聞かされたのは昼休憩だったな・・・十蔵さん、奥さんの愛妻弁当を食べながら」

「実は私は社長なのだよ春樹君。って言ったら驚くかい？」

って言われた時はつい、飲んでいた珈琲を噴き出した。

しかも親会社の社長と聞いてビビって腰が抜けたりはしなかったが逆に納得がいった。

だって十蔵さん・・・清掃員なんて生温いオーラを纏ってるから。それも人の上に立つ親父に似たオーラを。

それから十蔵さんとはたまに酒を飲み交わす仲になった。
十蔵さんの奥さんとも会ったが若い。 歳（奥さんのために伏せるよ！）らしいが二十代にしか見えなかったものだ・・・。

そう言ったら十蔵さんに駄目出しされた。俺が童顔みたいなのはわかってるんだコンチクショ！。

これが会社で働く俺の仕事模様。

午前九時に始まり、正午に昼休憩、午後一時半に仕事再開。
それから定時の午後五時半まで仕事をするのである。

「じゃあお疲れ春樹君。また明日もお願いするよ」

「十蔵さんも。また暇になりましたら行きませんか？」

指でクイツと何かを飲むジェスチャーをすると、十蔵さんは満足そうに頷いた。

どうやら飲みに行く約束ができたようだ。

私服に着替え、働いていた全員にお疲れ様です。と声を掛けながら幼稚園に直行。

「あ、おとうさん～～！」

「悪い。待たせたか？先生、いつもありがとうございます」

「あ、いえいえ！」

「ほら美弥先生、アタックアタック！」ヒソヒソ

「え、でもでも・・・私は・・・」

「じゃあ俺はこれで。一夏、乗った乗った」

「あ、ちょ、あの！」

夕飯の買い物もあるので早く、一夏を後ろの椅子に座らせると幼稚園から出る。

後ろで先生方が何か言っていたが、気にしない。気にしてはいけない。

自転車を漕ぎながら一夏と話をする。

「今日の飯は餃子にしようかと思うんだが」

「えー、おれはとんかつがいいな」

「前に食べたから今度な？後は麻婆豆腐か何かを作ろうと思う」

「豆腐たつぷりで辛さは控えめ！」

「よしきた。今日は手伝うか？」

「うーん・・・また、教えて？」

「了解だ」

自転車を走らせながら一夏と帰りで恒例の幼稚園で何があったかを話す。

前は先生方の目が怖いとか言っていたが今は箒ちゃんや同年代の友達の事を話している。

取り敢えず先生方の話はスルー。なんかやらかしたら通報をしようかと思う。

「あ。おとうさん、ちふゆねえがいる」

「・・・帰ったばかりなのか？」

買い物を済ませ、前のカゴに二つの買い物袋、一夏が後ろで一つの買い物袋を持つ。

家の前に来ると、千冬となぜか束がこちらに歩いてくるのが見えた。

まさかまた飯をたかりに来たのか・・・？

「あ、ただいま父さん。買い物帰り？」

「ああ。というかなぜ束がいる？」

「飯を食いに来た！」

予感的中。束は飯をたかりに来たようだ。
念のために少し多目を買っておいてよかったな、食材。

マンションの俺が借りてる部屋の鍵を開けると、真っ先に束が靴を脱ぎ捨てて入った。

制服の襟を掴むと、靴をきちんと並べさせてから入れる。
千冬と一夏はきちんと靴を揃えてから入るようになってあるの
で問題なし。

冷蔵庫に買ったものを入れてると、一夏と束がリビングのテレビでゲームをしていた。

俺は豆腐や餃子の皮やらをそこから取り出すと、台所で夕飯作り。
・・・この役目、母親である秋枝の仕事なんだがなあ・・・でも
無理か。あいつ、家事はできないし。

「おい、束。家に帰らなくてもいいのか？柳韻とか篝ちゃんが心配
してるぞ」

料理をしながらリビングにいる束の背中に呼び掛けると、カチカ
チとプレイしていた束がピタリと止まり、画面にGAME OVER
Rの字が現れた。

「・・・束さんはあんなのよりちーちゃんやいっくん、貴方と一緒に
いる方がいいよ。篝ちゃんはあれに気に入られてるし・・・」

PS3でアー ドコアやりながら束は寂しそくに呟いた。
なにやってんだあの馬鹿親子は・・・柳韻、話し合うようにと言
っただろ？

なのに束が寂しそうにしてちゃ意味がないだろうが。

「・・・仕方がないな。今日は泊まってけ。お前の事だから着替え
とかあるんだろ」

「・・・いいの？」

「ああ。お前が辛い時はいつでも助けてやると言っただろ？お前は
まだ子供なんだ、大人に甘えてもいいんだよと・・・」

完成した餃子を皿に盛ると麻婆豆腐も皿に盛り付け、千冬を呼ぶ。
千冬と協力しながらテーブルに並べると、ゲームをしていた一夏
と束もそれぞれの席に座る。

「普段から遠慮なんかしてないお前だから今更だな。空いた部屋が
あつたはずだからそこを使うか？」

「ちーちゃんの部屋がいい！」

「父さん、部屋の変更を提案する。こいつと同じ部屋だと何をされ
るかわからん！」

「・・・・・・・・・・難題にぶち当たったな」

この変態をどこに寝かせようか。

一夏は俺と寝るから駄目。千冬は最近一人で寝るがたまに布団に潜り込むことがある・・・。

脳内会議・・・会議・・・会議・・・終了。

「・・・どうでもいいや」

「父さん!？」

「性的な悪戯をしないなら誰とでもいいし、布団は予備があるから使っても構わないぞ」

「わーいつ!」

結果。千冬と寝ることになった束。

千冬は猛反対していたが、束が寂しくならないように。と言うと渋々了承した。

許せ。今度またきんぴらごぼう作ってやるからさ。

それから一夏と風呂に入り、わしゃわしゃと頭の水気を取ると、

上半身だけは裸のままでタオルをかけてリビングに入った。

「千冬。風呂空いたぞ」

「ぞー！」

風呂上がりにビールを一本だけ取り出すと、一夏とグビツと一飲み。

「・・・いや。一夏は牛乳だぜ？ビールはさすがに飲まさないわ。」

長い髪を纏めて結うと、なにやらパソコンを一心不乱に叩く束が見えて声を掛けることにした。

「・・・束？」

「わっひゃいつ?!」

ポンと肩を叩くと、束はビックウー！と驚き、パソコンを抱えて後ろに飛ぶ。

少しだけ息が荒い束はプルプル震える手で静かに口を開く。

「み、見た？」

「？ なにかだ？」

「な、ならいいんだ！ あー、ビックリし、た・・・？」

束はホツと息を吐くと、視線を顔から下へと移り、顔を赤くした。

・・・あ。やべ。上半身は裸のまんまだわ。

取り敢えずソファーに置いておいたシャツを着ると固まる束を揺らす。

「（はだかはだかはだかはだかはだかはだかはだかはだかはだかはだかはだかオトコノハダカ）」

「おーい束ー？」

「（はだかはだかオトコノハダカはだかはだかはだかはだかはだかはだかはだかオトコノハダカ）」

「のわっ！？」

なんか束がぶつぶつと言い、頭から煙を噴き出すと、きゅうと言いながら倒れた。

慌てて抱き止めると束をソファーに寝かせた。

・・・耐性ないのかね？ 柳韻のあれとかは見えないのか？

一応、柳韻には電話をして預かることは伝えている。

柳韻は申し訳なさそうだったが、ジジイはどこか嬉しそうな声をしていた。

ジジイ。昔は尊敬できたんだけど今は無理だな。くたばれ。

「そっいゃ・・・」

束の抱えていたパソコンの画面、なんだったんだろうな？

一瞬しか見れなかったが、“IS”というキーワードだけは見えた。

・・・なんか波乱の予感がするな。

ま。世界が束を拒否しても俺だけは味方でいよう。

約束したからな。

何があっても味方でいると。

第拾巻話

本日は晴天なり。

またあれから時間が流れ、一夏は小学生になり、千冬は受験生、生徒会長になっていた。

束や篝ちゃんもすすく成長し、篝ちゃんは一夏に恋をしているようだ。

だがジジイはまだ束を毛嫌いしてる節があるのは頭が痛い。

千冬は生徒会長になったせいかな、かなりクールになり、口調もピシッとした感じになり、学校の教師にも絶大な信頼を得ている。

また、髪型も変わり、俺の真似をして長く伸ばしてポニーテールのようにしている。

なんだが、千冬は髪とか手入れしないから俺が自分の髪に櫛を通すついでに千冬のもしているわけだ。

さらに、千冬は剣道部を引退しているが中二で全国大会に出場、優勝して日本一になった経歴がある。

新聞にも取り上げられ、類い稀なる剣の才に目を付けられて剣道部が強い高校にスカウトされている。

だが、千冬はスカウトを断り、家に近い高校を受験する事になっている。

本人曰く、父さんと一緒にいたいから。一人じゃ寂しいと甘えるから蹴ったのだが。

剣道部が強い高校に行くと寮に入らなければならないから嫌だ。だそつだ。

一夏は小さかった身体も少しずつ大きくなり、腰より上の身長になっっている。

親父の生き写しとも言える顔をしており、性格も似てきている。天真爛漫、唯我独尊、我儘小僧が親父だったが、一夏は他人を思いやり、弱きを助けたりしている。

前に箒ちゃんを虐めていた奴を懲らしめたことがあり、驚いたが、相手側の親御さんには頭を下げておいた。

さすがに暴力沙汰は駄目だからな。

少しずつ、一夏には力の在り方と振るう心構えも教えなければと思う。

ただ、拳に身を任せればただの暴力。人のために振るうにしても、一歩間違えれば暴力になりかねないからな。

・・・でも虐められている子を助ける一夏の成長に嬉しく思う自分がいるのは否定しない。

そして、篠ノ之束。柳韻の娘で稀代の天才である彼女。

彼女は篠ノ之家でも避けられているようで、もう俺の家に住み込んでいる。

ジジイは才能のないのと明らかに人間離れした束の頭脳や精神を疎ましく思っているからかね？

自分の孫だろうが。普通に接して味方でいてやれよ。

束は俺と千冬に一夏と一緒に暮らし、ちよくちよく俺に甘えてくる。

父親である柳韻はどこか避けている節があり、ジジイは論外。母親も似たようなもので甘えることができなかったのだろう。

抱きついたり、添い寝をしようと言ったが、拒まずに束の安らぎにな

るようにはしている。

「なんだが。最近、千冬と束の様子があれなんで偵察しちゃいます」

「わーいつ！　なんか刑事ドラマみたいっ！」

「しっ！　静かにしろ、バレるだろ！」

「ふがつ、ぶがつ！」

「あ、あの・・・一夏が苦しんでいます・・・よ？」

まあ、最近の二人の様子がおかしいのでこうやって尾行をする事になったわけだ(?)。

朝早くから消えた二人を追うようにこそそと隠れながら・・・
みたいな事はせずに、車を運転して遠くから盗みm・・・げっふん！　観察している。

二人、特に千冬は親父の孫だからか、氣を感じやすく、追い掛けるのも楽なのである。

束は天才科学者であるため、尾行を察知する機械でも持ってそうなのだ。

だからできるだけ付かず離れずでじわじわと尾行をしている。
後ろの後部座席には一夏と束の妹の箒ちゃんが同行しており、前に乗り出してカーナビを見ていた。

「ん~~~~~・・・ここ、だな。だんだん人気がない場所に歩

いていつてるな」

「おー、すげー！ さすがは父さん！」

「凄い・・・離れててもわかるなんて・・・」

遠回りするように車を走らせながら、千冬と束を追っていると、ふと、気が地下に行くのを感じた。

・・・地下？　なんで下に気が動いてんだ・・・？

ま、いいか。カーナビを見てもデパートの地下に行ってるのがわかったし、取り敢えず買い物をするか。

「あいつら、このデパ地下に行ったみたいだぞ。なんか怪しい事をしてるわけでも無かったのか？」

「・・・ジャ　コ？　千冬姉と束姉は買い物に行ったの？」

「だな」

「姉さん、何をしてるんだろう・・・」

氣に乱れは無し。最初、脅迫されて陵辱されたかと思っただが、臭いはしない、精神も安定してるから大丈夫。デパ地下ならなんか買ってるんだろうね。あそこ、かなりの品揃えだし。

カーナビを切ると後ろを向く。

一夏と筈ちゃんと目が合い、にやつと笑つと親指を外に向けながら動かす。

「なんか、食つか？」

「食う！」

「た、食べます」

近くのファミレスでパフェやらケーキを二人に食べさせることにした。

「・・・はあ？ お前、自分が何を言ってるのかわかってんのか？」

『すまない。父上が倒れて病院に行かなければならないんだ。箒も頼めるか？』

「くたばる寸前のジジイなんざほっとけよ。それより娘と向き合ったらどうなんだ？ あ？」

『・・・本当に、すまない春樹』

「あゝっ！ おい待てや柳韻・・・！ 切れやがった」

あれからファミレスから買い物やらをして疲れて寝る二人をソファーに寝かせてから柳韻に電話をした。

ジジイが倒れたらしく、病院に行かなきゃならないようで、束は勿論、箒ちゃんまで預けやがったあの馬鹿。

母親であるあの人もジジイの世話。難儀だねえ・・・。

・・・どないしょ？ 束は家に住んでるけど箒ちゃんの着替えとかは・・・うーむ・・・。

「買い物行くか」

結局、これしか思い付かなかった。

夕飯の買い物は済ませてるけどまた買い物に行くしかないな。

なぜかこの時は篠ノ之家から着替えを取りに行くという選択肢は浮かばなかった春樹だった。

「テレビでも見るか。たしか相棒の再放送が・・・」

『左京さん！　これ！』

『・・・お手柄です。亀田君！　これでやっと、真実が見えてきました・・・！』

テレビを付けると、再放送のお馴染み、相棒がやってた。

眼鏡をかけた杉下左京、相棒の亀田薫のコンビによる刑事ドラマの定番である。

寝ている二人に毛布をかけてから冷蔵庫にあるコーラを取り出して見ながら飲む。

・・・にしても。あいつら遅いな・・・デパ地下に行ってからもう三時間経つぞ？

氣を探っても、場所は変わらないはずなん・・・ん？　さらに下に・・・？

「・・・おかしい。デパ地下はあんなに深くはないはず・・・なん
でそこまで氣が下がってるんだ・・・？」

氣になり、デパ地下まで行こうと立ち上がると、ドラマのBGM
が止まり、緊急ニュースの音楽が流れる。

テレビに視線を戻すと、アナウンサーが慌てた様子で手に持つ紙
を読み始めた。

『ドラマの再放送の途中ですが、緊急ニュースをお送りします』

「？ 珍しいな。衆議院の選挙があるわけでもないのに」

『今日未明、世界各国の軍事関係からの情報により、判明したこと
ですが』

「・・・なんか嫌な予感がするぞおい」

『謎のハッカーからハッキングとクラッキングを受け、軍事関係基
地よりミサイルが発射され、それらが国会議事堂を狙う事がわかり
ました』

「んだとっ!？」

ガタツと椅子が後ろに倒れ、寝ていた二人がビクツと起きる。
ニュースの右上にはミサイルが発射された様子が映っており、合

成ではない事はすぐにわかった。

「・・・？　とう、さん・・・？」

「・・・一夏、箒ちゃん。すぐに出掛ける用意をするんだ」

「え？」

「早くっ！　くそっ！　あの二人はまだあそこにいるのか！？」

国会議事堂・・・ここから近い。ならばミサイルがここに来る危険性があるということ・・・。

チイツ！　誰だミサイルなんてハッキングで発射した馬鹿はっ！

兎も角！　今は避難しなければならない！

軽く荷物を鞆に詰めると、ガスやら電気を全て抜いてから戸惑う二人を抱き上げる。

テレビはまだつけっぱなしにしたままだが、今は避難が先決。

「父さん！　何があっただよよ！」

「話は後だ。今はここから避難してミサイルを避けないと・・・あの二人、どこにいやがる！」

背中にしがみつくと一夏、左手で箒ちゃんを抱えたままエレベーターに乗る。

乗る最中に携帯をラジオに設定してイヤホンを右耳にだけつけて
ニュースを聞く。

流れるのは避難勧告とその場所。それを頭に叩き込むとエレベーターから降りて走る。

「一夏、悪いが千冬か束に連絡だ。出なくても何度も掛ける」

「わ、わかった!」

「ごめんな筈ちゃん。なんかやばい事になってるが心配はしなくていいからな」

「あ、は、はい!」

こんな時に車なんか使えば渋滞に嵌まって動けなくなるから足を
使うしかない。

・・・だが、平和ボケした日本の国民じゃ、そんな事は思い付か
ないだろう。

パニックになるのは間違いないが、ニュースを流したのはある意
味、正解だ。

何も知らないまま、逃げずに死ぬよりマシだからな。

右耳に流れるニュースを聞きながら町を走る。

・・・ちつ。マトモな情報が入らないな・・・。

問題は日本政府がミサイルをいつ知ったか(・・・・・・・・)、正
確にはいつ発射されたか(・・・・・・・・)を知りたい。

「父さん！」

「なんだっ！」

「束姉に繋がった！」

「よっしゃでかしたぞ一夏！・・・もしも束か？」

『あつ。うん』

「？ いまどこにいる？ ニュースは見たのか？ 避難はしてるのか？」

『・・・ごめんなさい。まだ話せないけど、今はちーちゃんに全てを任せてくれないかな？ 貴方やいっくん達には怪我はないようにするから』

「それはどういう・・・」

ふと、妙な音がして立ち止まり、振り返った。

・・・おいおい。おいおいおいおい！ マジかよッ！

ミサイルが見えやがる！ このままじゃここもやばい！

どうする？ 俺の目でぼんやりと見えたから距離は長く見積もって100・・・ミサイルの速さを考えるとすぐに着弾するぞ！

「チイツ！ 束、後で事情を話してもらっからなっ！」

『待つて！　ちーちゃんが・・・』

携帯を切ると、ポケットに仕舞ってミサイルから逃げるために公園にある地下水道へ向かう。

あそこはかなり広いから被害も少ないはず。二人を入れたら即刻、ミサイルを素手で破壊する！

さつきよりスピードを上げて走るが、ミサイルはどんどん近付く。状況が飲み込めた他の奴等も慌てて逃げ出し、近くの妊婦と子供が突き飛ばされたのが見えた。

すぐに近付いて手を貸すと、また走る。

「二人共、大丈夫か？　まだ走れるな？」

「なんとか・・・父さん、大丈夫だよな？　俺達、死なないよね？」

「安心しろ。何があってもお前らは守る。すいません、ちょっと失礼します」

「す、すいません。私なんかのために・・・」

「いいって。あんたの子供も赤ちゃんも守りますから・・・さつき、早く行くぞ！」

妊婦さんを横抱き、一夏と篝ちゃんより小さい子を背中に乗せると、一夏と篝ちゃんを前に走らせながら追い掛ける。

こうしている間にも、ミサイルはどんどん近付いてくるため、焦る妊婦さん。

・・・仕方ない。口止めするか。

「すみません。今から見るのは内密に願います。いいですね？」

「え？ な、何がですか？」

・・・ふう・・・。

静かに息を吐くと、身体の氣を右足に集中させる。

一度ステップを踏むと、後ろを振り向くように飛び、足を振り抜く！

氣刃・鎌鼬

振り抜かれた足から真つ白な光の刃が飛び、近かったミサイルを破壊した。

「ぽかーん・・・」

「逃げるぞ。ほらほら走れ走れ」

妊婦さんはあり得ないような顔をして後ろを見ていたが、あえて無視して公園に向かう。

鈍った。前なら一振りで三つ出るはずだったのに……。
しかもしばらくは氣が使えないとかあり得ないし。

しばらく走り、シエルター代わりになる地下水道の入り口が見えてきた。

だが、人が多くて無理らしく、違う入り口に向かうことにした。
妊婦さんにあまりストレスはかからないように注意しながら。

……だが、さつきから可笑しいな。ミサイルがあまり来ない上に遠くで爆発する音が聞こえる。

ニュースも流れなくなってるし……何があつたん……！

嫌な予感がして後ろを見れば、一発のミサイルがこちらに向かうのがはっきりとわかった。

周りには俺達しかおらず、焦る。

まずい……近くに着弾したら……。

考える間もなく、近くに着弾したミサイルの爆風が俺達を襲い、吹き飛ばされる。

なんとか妊婦さん、妊婦さんの子供に二人を庇いながら壁に叩きつけられた。

全員、無事のように安心すると、爆発した影響で飛来した瓦礫が頭を直撃し、意識が闇に落ちた。

「と、父さんッ！」

「春樹さん！」

二人の慌てる声を聞きながら・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7710x/>

とある織斑家の最強親父

2012年1月10日16時52分発行